データからみる家族の諸相：夫婦関係を中心に

東京大学社会科学研究所
鈴木富美子

社研サマーセミナー 2018.8.2
「統計データが映す私たちのくらし」

◆社会調査を用いた夫婦関係研究で重要なこと

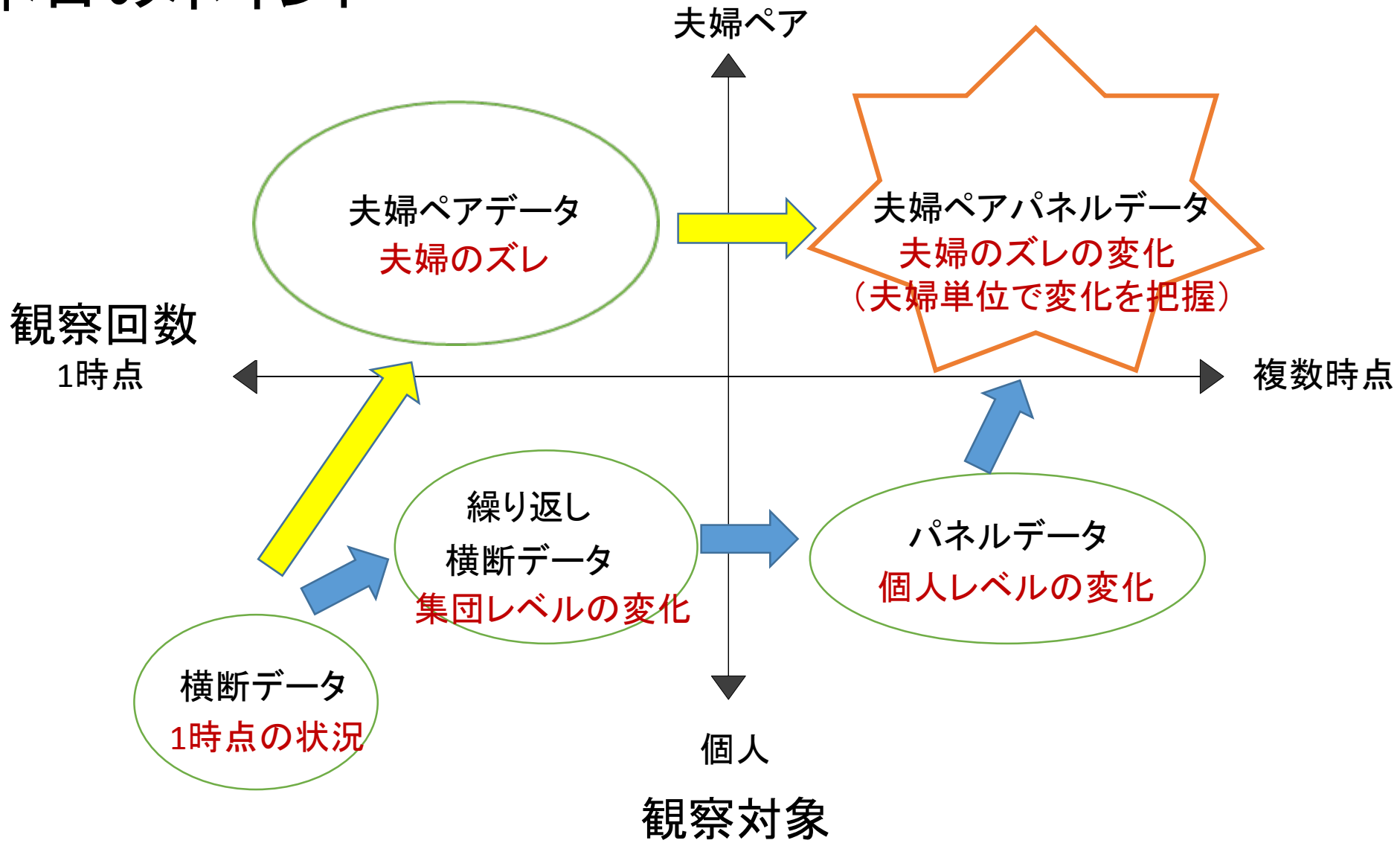
（１）調査項目：何を聞くのか？（内容、頻度など）
（２）データの取り方
　①観察回数：何回聞くのか？（1回／複数回）
　②観察対象：誰に聞くのか？（個人／夫婦ペア）

↓

明らかにできることは異なる

◆本日のポイント

＜社会調査と夫婦関係研究＞



◆本日の内容

1. 横断データと繰り返し横断データ
2. 縦断（パネル）データ
3. 「夫の家事・子育て」をめぐる意外な落とし穴：
   夫婦ペアデータ
4. 現在、取り組んでいること：夫婦ペアパネルデータ
5. まとめ：よいパートナーシップを築くために

1. 横断データと繰り返し横断データ

1.1　横断データとは何か？

1時点の横断調査は調査の基本！

例えば　「全国家族調査」（NFRJ）　by日本家族社会学会

目的：全国規模のデータ構築とデータの共同利用

これまでに3回の調査を実施：NFRJ98, NFRJ03, NFRJ08

↓

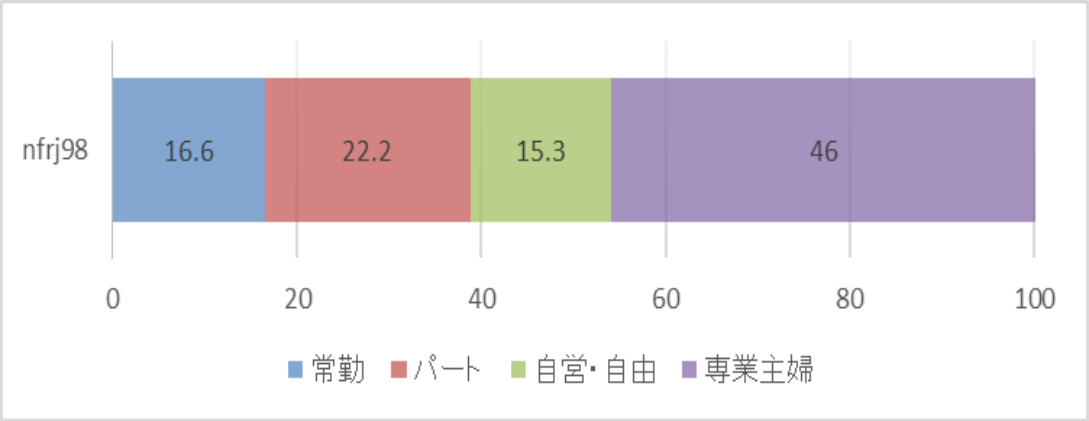
基本的に同じ調査デザイン、対象者が異なる

1.2　1つの変数に着目する:分布状況をみる

(1)既婚女性の就業形態

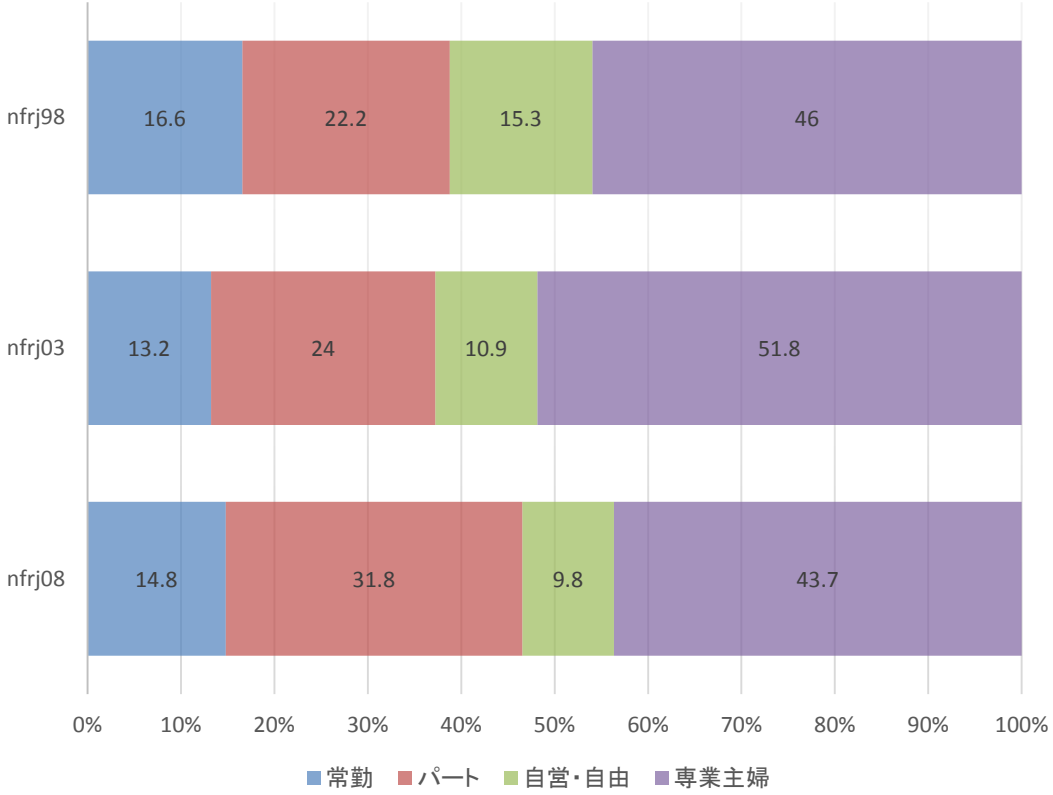
☆鈴木(2016)より

図表1　NFRJ98:1時点の横断データ



＊末子(一番下の子ども)19歳以下

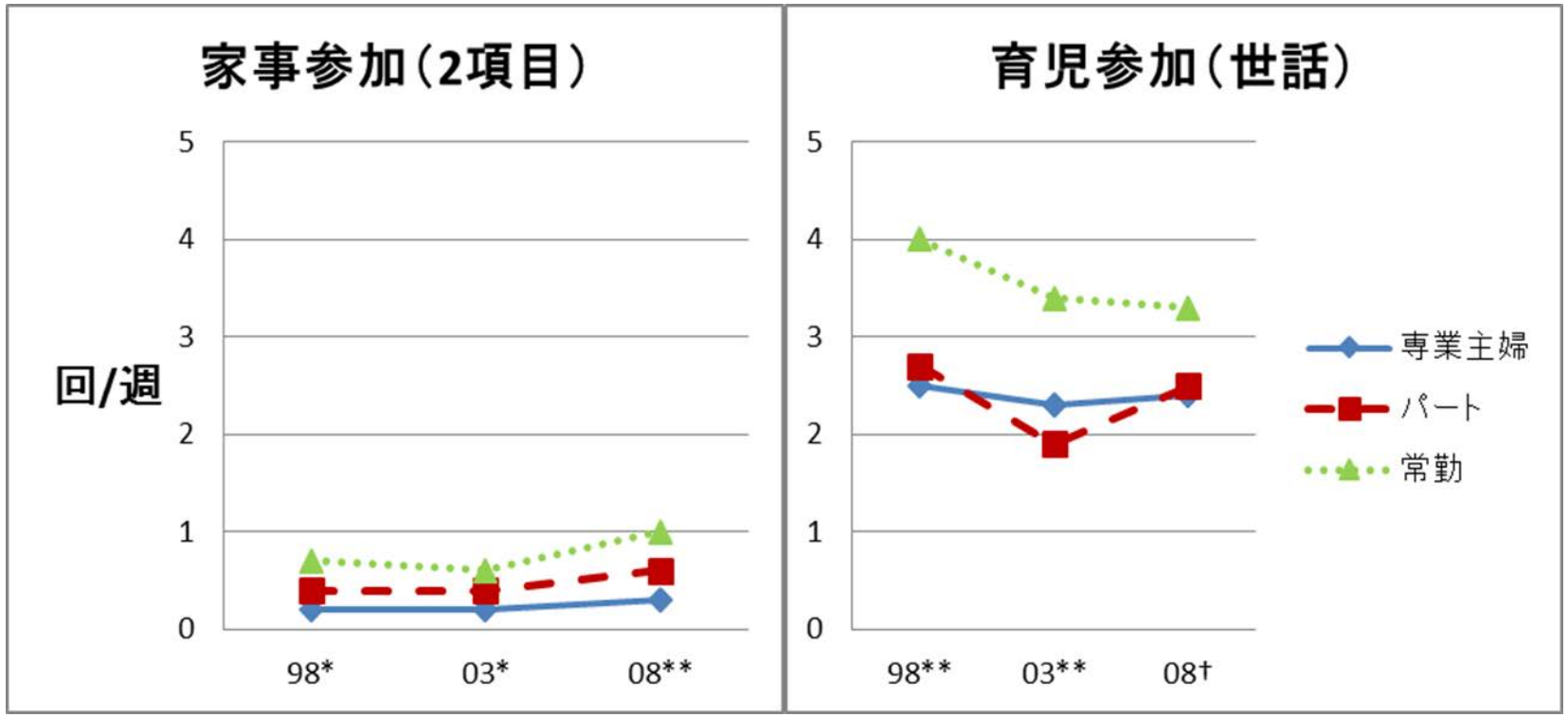
図表2　NFRJ3時点(98,03,08)の状況
繰り返し横断データ



→1時点のいわばスナップ写真

→繰り返すことで、時代の変化を把握
既婚女性のパート化の進行

図表3　夫の家事・育児関与（末子6歳以下）

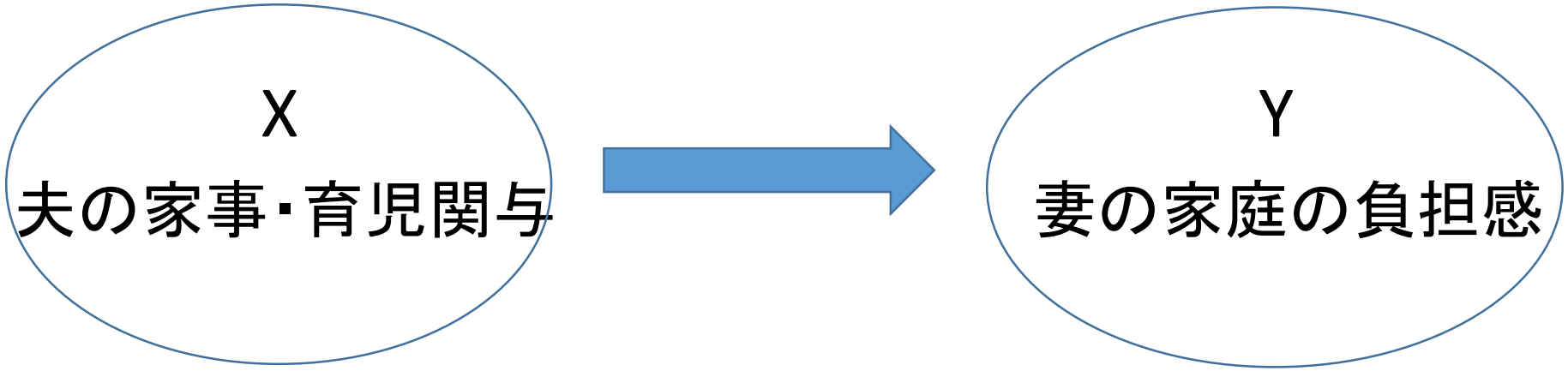


＊「食事の用意」と「洗濯」の平均　　＊「子どもの身の回りの世話」

☆鈴木(2016）より

→家事：妻が「専業主婦」や「パート」だと夫はほとんど行わず。
　育児：家事に比べれば行っているが、3時点でそれほど変わらず

1.2　2つの変数に着目する：変数同士の関連をみる



Q. なぜ、夫の家事・育児関与に多くの研究が行われてきたのか？
A. <u>妻の家庭の負担感</u>に関連すると考えられてきたから。

BUT,妻の負担感に効果があるのは<u>情緒的サポート</u>！

→2つの変数の関連の仕方が時代のよって変化したのかどうかを検証

図表4 「妻の家庭の負担感」と関連する要因:3時点比較

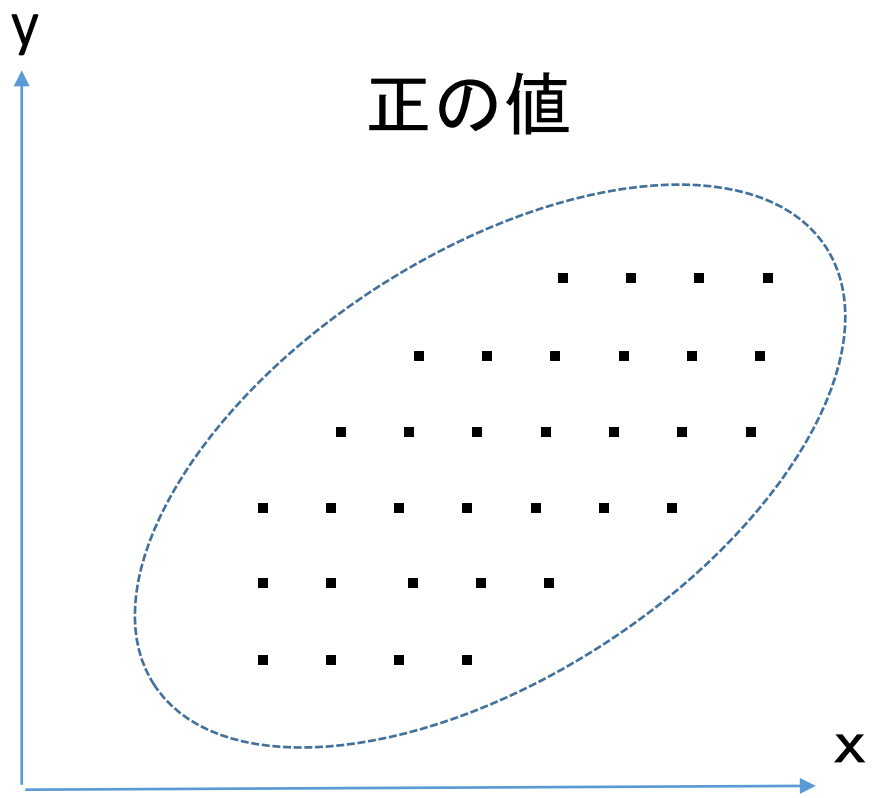
	98	03	08
	基本モデル	基本モデル	基本モデル
本人教育年数	0.046	0.112 *	0.007
夫年収	−0.018	−0.075	−0.075
末子年齢	−0.067 .	−0.089	−0.111 †
妻就業形態（基準：専業主婦）			
常勤	−0.009	−0.064	0.096
パート	0.046	−0.038	0.086
夫育児分担	−0.065	−0.067	−0.181 **
夫家事分担	−0.054	0.002	0.045
夫の情緒的サポート	−0.209 **	−0.229 **	−0.282 **
親の居住場所（基準：同近居なし）			
実母・義母との同近居あり	−0.122 *	−0.070	0.011
実母との同近居あり			
子ども数		0.068	
常勤×夫の情緒的サポート			
パート×夫の情緒的サポート			
常勤×同近居なし			
パート×同近居なし			
常勤×夫育児分担			
パート×夫育児分担			
R2乗	0.084 *	0.091 **	0.159 **
調整済みR2乗	0.048 *	0.066 **	0.126 **
n	265	367	273

注）**は1%水準，*は5%水準，†は10%水準で有意な値を示す。

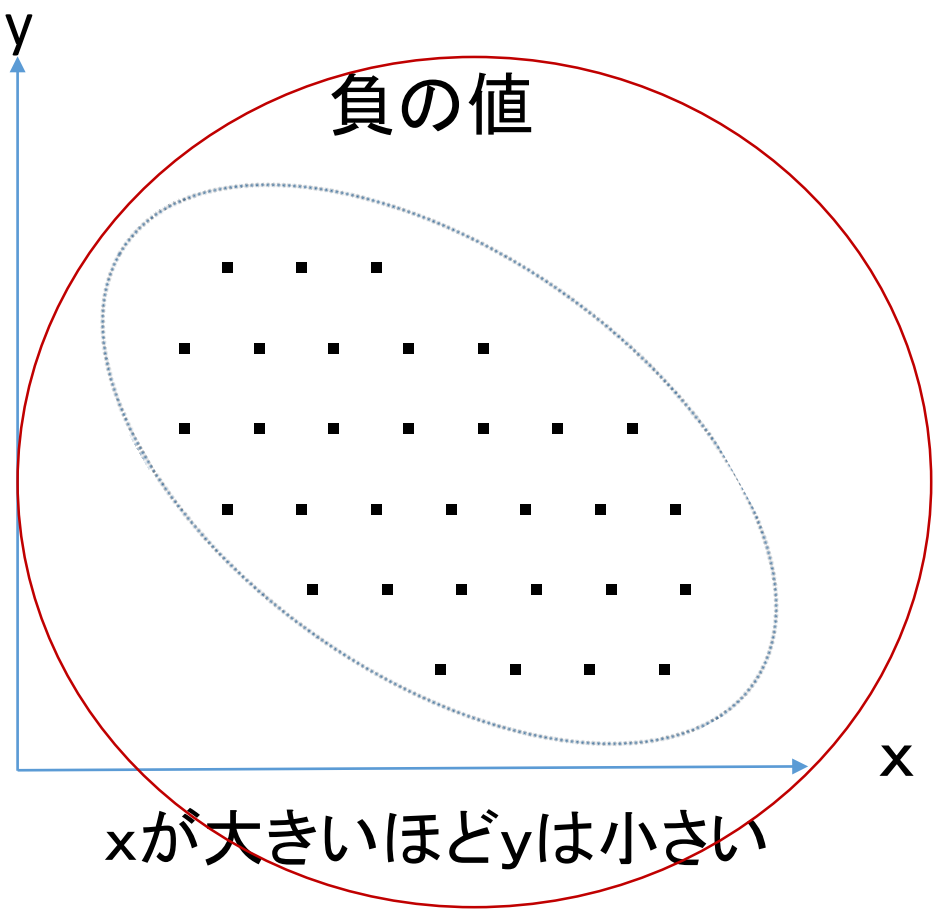
夫のサポート

☆鈴木（2016）より

◆「夫のサポート」と「妻の家庭の負担感」の関連（イメージ）



xが大きいほどyも大きい



xが大きいほどyは小さい

→夫のサポートが多いほど、妻の負担感は低い

◆「夫のサポート」と「妻の負担感」の関連

	NFRJ98	NFRJ03	NFRJ08
夫の育児分担	:-.065	→ -.067	→ -.181**
夫の家事分担	:-.054	→ -.002	→ -.045
夫の情緒的サポート	:-.209**	→ -.229**	→ -.282**

夫の育児分担　　:08ではじめて効果

夫の情緒的サポート:効果は増大傾向

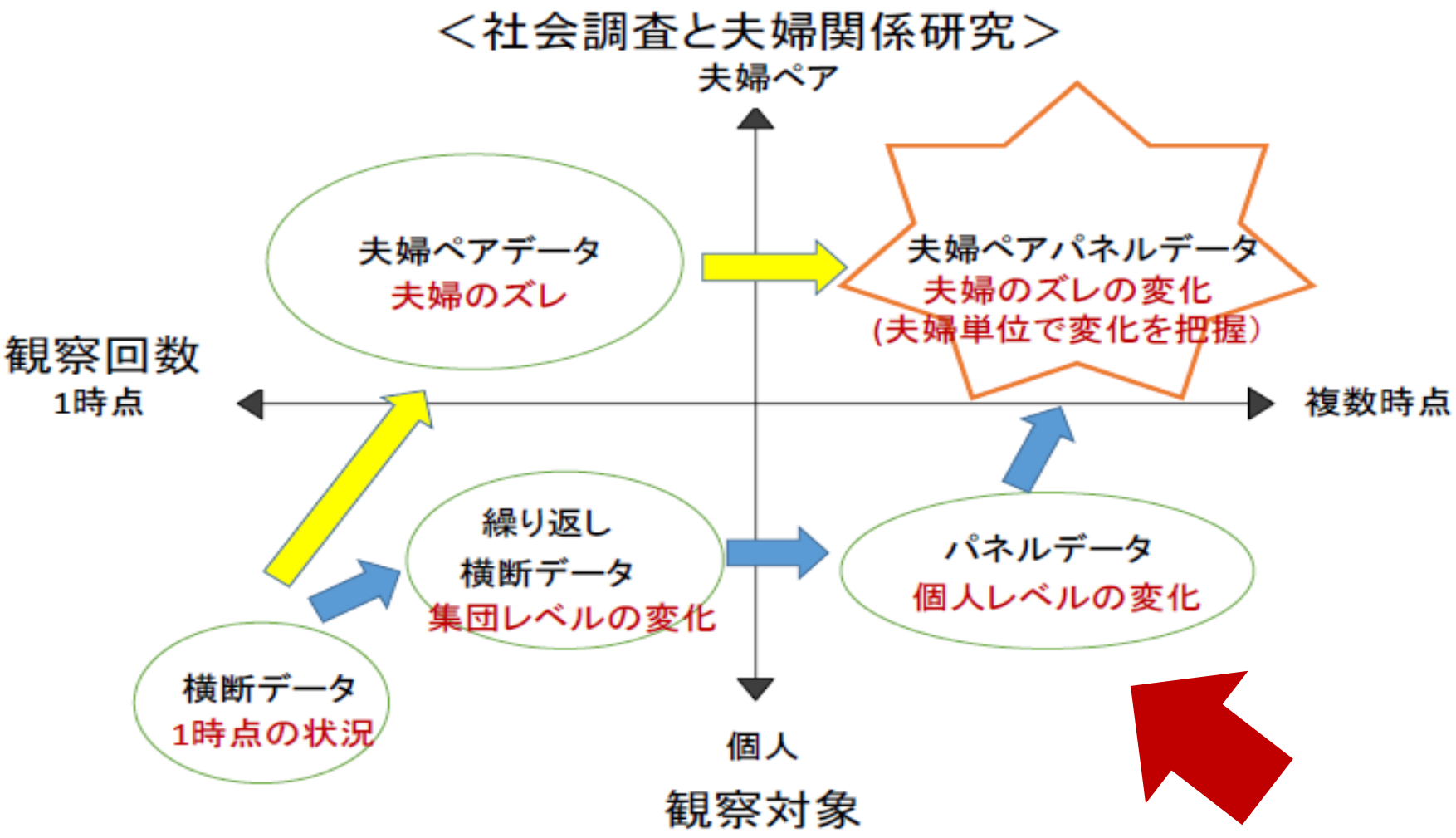
↓

妻の負担感に対する夫のサポートの重要性の高まり

「土俵外」から妻を支える応援者　→　「同じ土俵上」で、共に子育てを担い、
分かち合う存在へ

2. パネル（縦断）データ

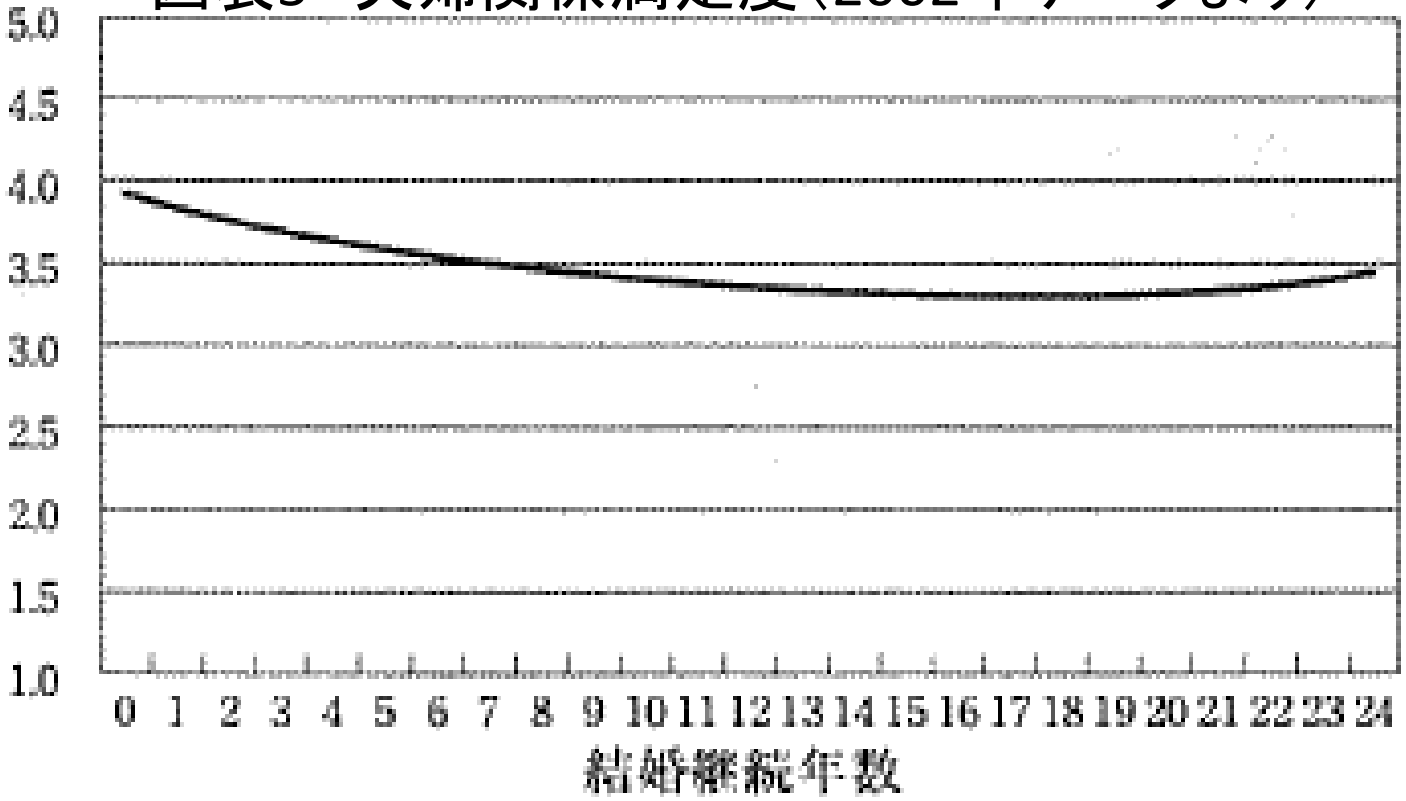
◆同一個人に対し、複数回の調査を行うことで、個人の変化を捉える。



2.1　変数1つに着目する：変化の様子をみる

（1）夫婦関係満足度のU字型カーブ：横断データより

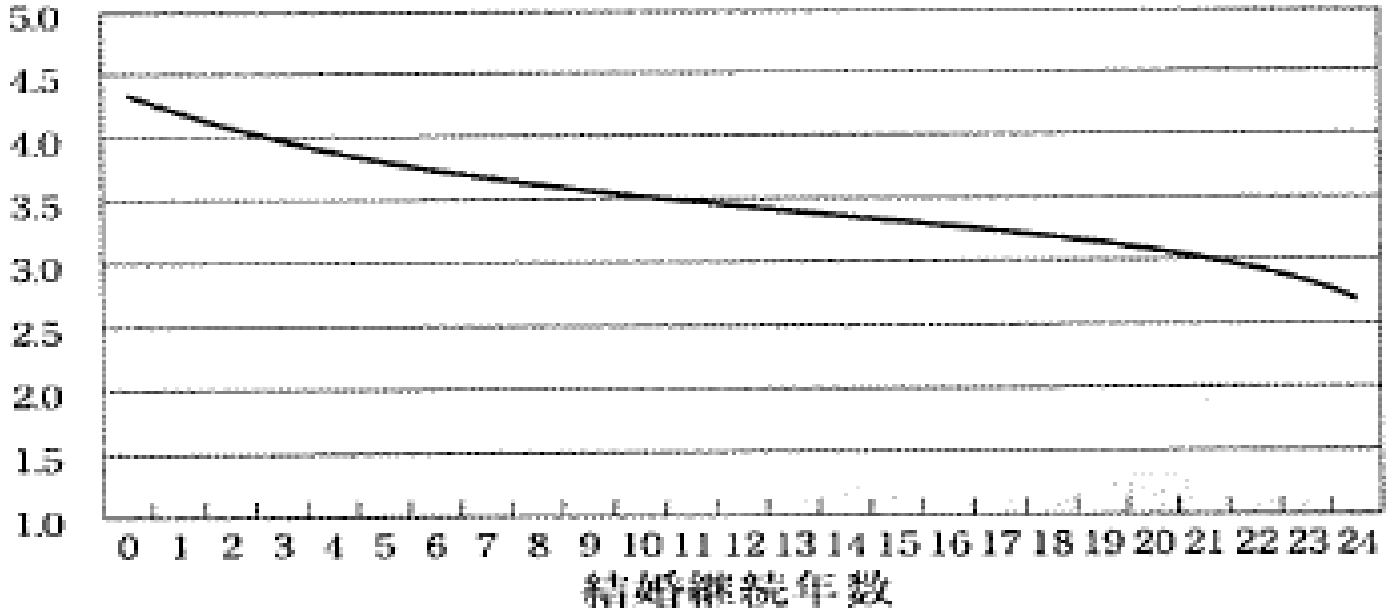
図表5　夫婦関係満足度（2002年データより）



永井（2005）より

→BUT，これは1時点のデータを使用。異なる結婚年数の人々の満足度をつなぎ合わせたもの。本当に結婚の後期段階に満足度は回復するのか？？？

図表6　夫婦関係満足度（パネルデータより）



永井（2005）より

・U字カーブにならず：サンプルの脱落による見せかけの効果

同一個人の変化を追うからこそ、わかること。パネルデータの利点。

↓さらに一歩進めて

Q. これは変化の一般的な傾向。本当に皆、下がるのか？個々人の違いは？

(2)夫婦関係満足度の変化のパターン（軌跡、様態）の把握

●パネルデータのメリット：

①個人の変化の把握

②態度や意識などの持続性、安定性の把握

＊貧困研究：

①貧困突入、貧困脱出，②貧困の固定化

↓

●満足度の持続性・安定性の把握→結婚の質にとっても重要

★夫婦関係満足度の持続性・安定性について（鈴木 2015）

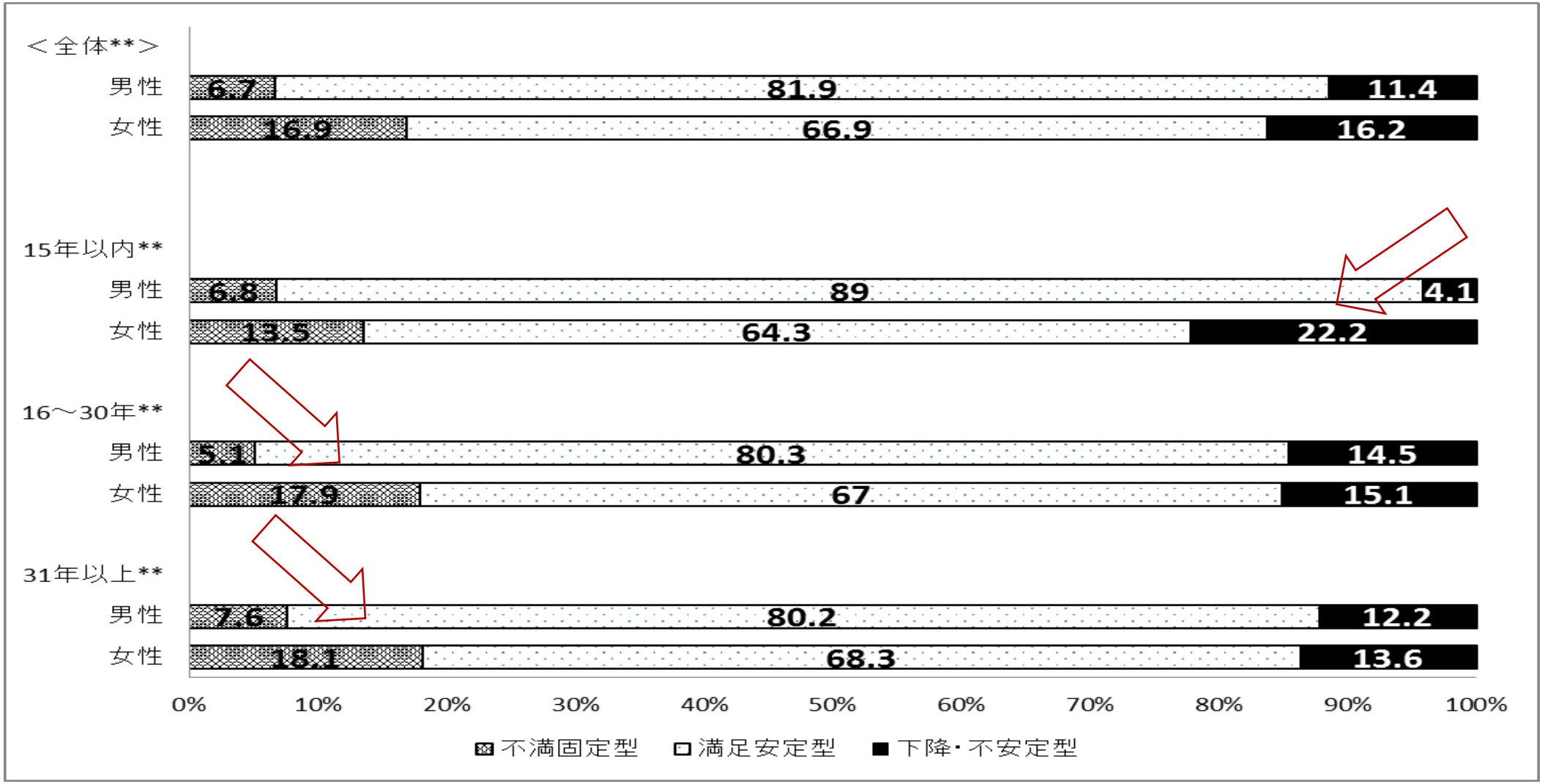
夫婦関係全体に対する満足度：「満足」「不満」

パネル調査で5年間追跡

↓

3つの「変化のパターン」を析出

満足安定型	下降・不安定型	不満固定型
71%	18%	11%



図表7　夫婦関係満足度の「変化のパターン」性別・結婚年数別

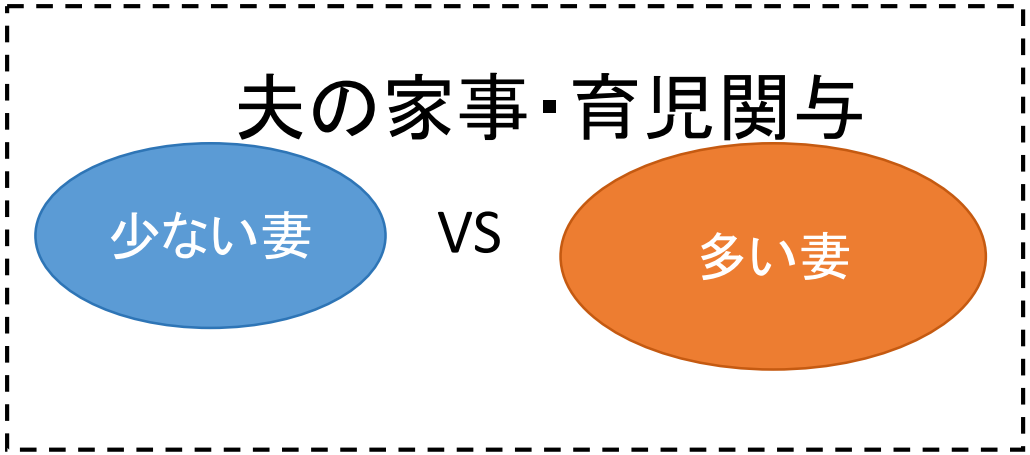
☆鈴木（2015）より

→男性：結婚年数にかかわらず、「満足安定型」が8~9割を占める。
女性：「15年以内」で多い「下降・不安定型」、それ以上になると「不満固定型」が目立つ。

2.2　2つの変数に着目する：変数同士の関連をみる

●横断データとパネルデータでは、みえるものが違う

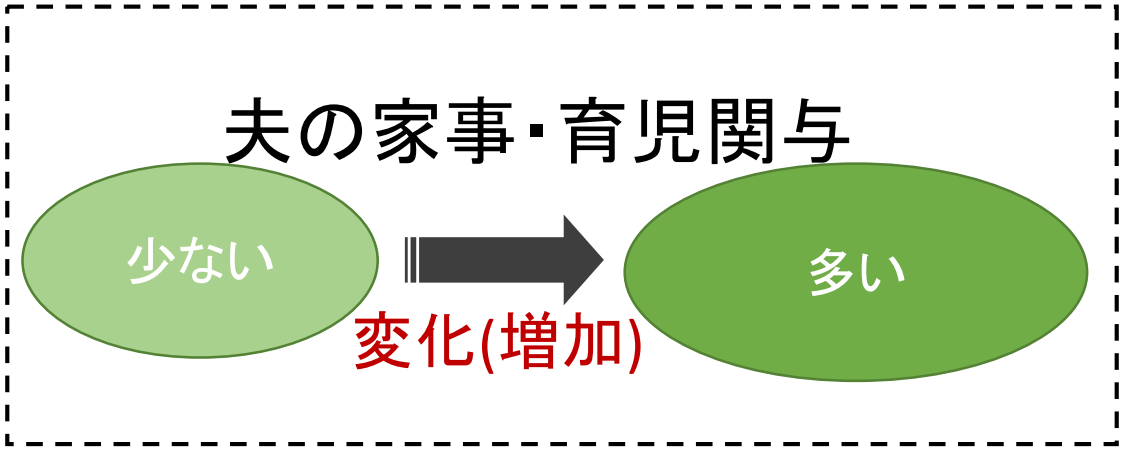
＜横断データ＞



Q. 満足度が高いのはどちらの妻？

同じ時点で異なる人を比較

＜パネルデータ＞



Q. 妻の満足度は高くなるのか？

同じ人を異なる時点で比較

図表8　夫婦関係満足度と関連する要因（子どもの年齢別）

◆女性	0~6歳		7~12歳		13~18歳	
結婚年数	−0.0095		0.0155	†	−0.0075	
本人（妻）収入	−0.0006	†	0.0001		0.0001	
配偶者（夫）収入	0.0002		0.0001		−0.0002	
本人（妻）労働時間	0.0047		−0.0051	†	−0.0047	
配偶者（夫）労働時間	0.0033		0.0014		0.0008	
本人（妻）就業の有無	−0.0750		0.0212		−0.0342	
親同居（基準：別居）	−0.0500		0.0597		0.0104	
本人（妻）健康状態	0.0340		0.0641	*	0.0104	
配偶者（夫）健康状態	0.0330		0.0350		0.0450	
子ども数	0.061		0.0142		−0.0540	
平日会話	0.0008		0.0003		0.0008	
休日会話	0.0018	**	0.0028	**	0.0015	**
情緒的サポート	0.1774	**	0.1835	**	0.1759	**
本人（妻）家事量	−0.0095		−0.0121	*	−0.0081	
配偶者（夫）家事量	0.0127	†	0.0180	**	0.0109	†
定数	0.6822	*	0.6345	**	1.5351	**
R−sq　within	0.1987		0.2428		0.1668	
between	0.6002		0.5908		0.5796	
overoll	0.5184		0.5324		0.5052	
n	401	**	506	**	493	**

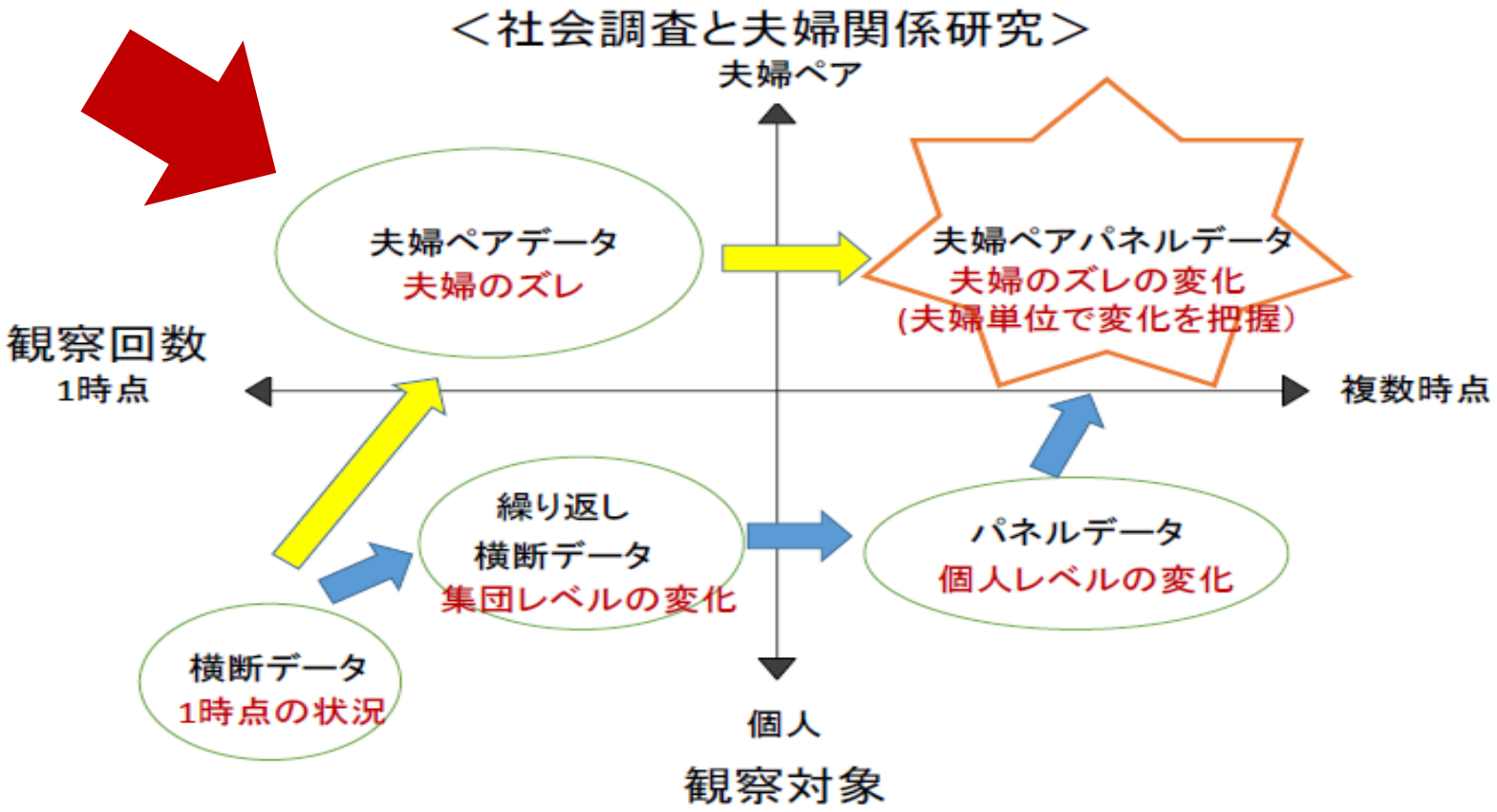
☆鈴木（近刊b）より

→夫の家事量が増加すると、妻の夫婦関係満足度は高くなる

夫のサポートが増えることは妻にとって重要な意味をもつ！

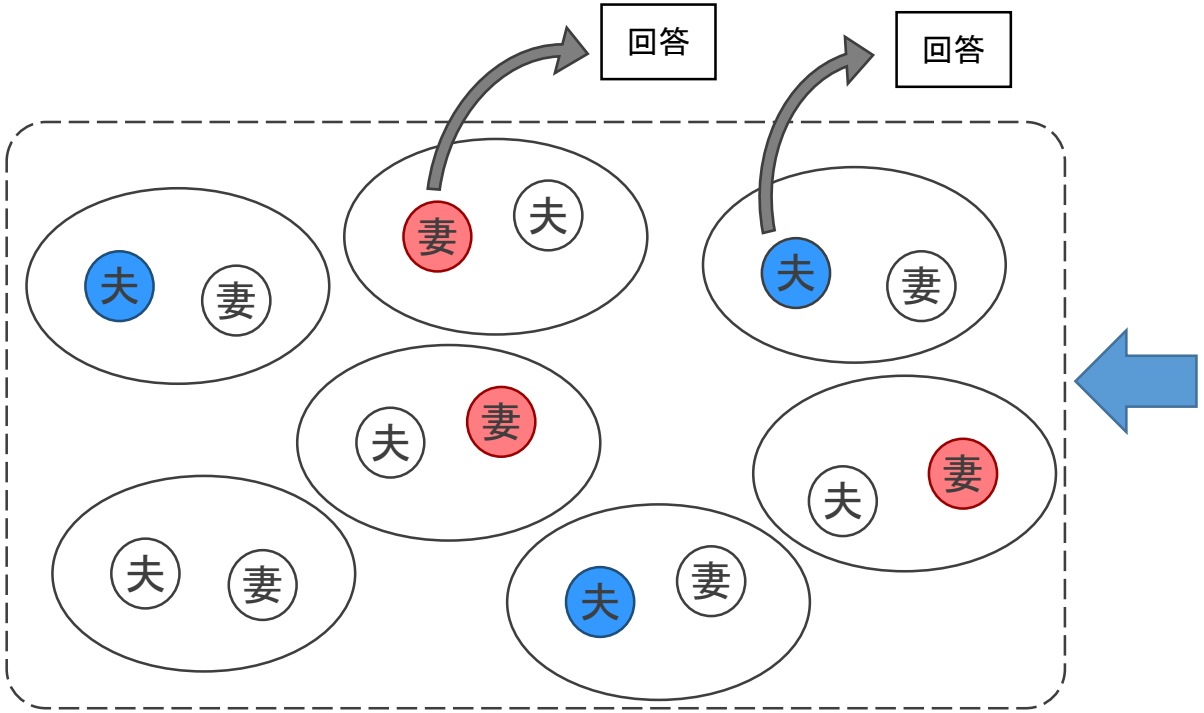
3.「夫の家事・子育て」をめぐる意外な落とし穴：夫婦ペアデータ

●「夫の家事・子育て」は妻の「家庭負担感」や「夫婦関係満足度」に重要！
　BUT、「夫の家事・育児」に際し、意外な落とし穴が！



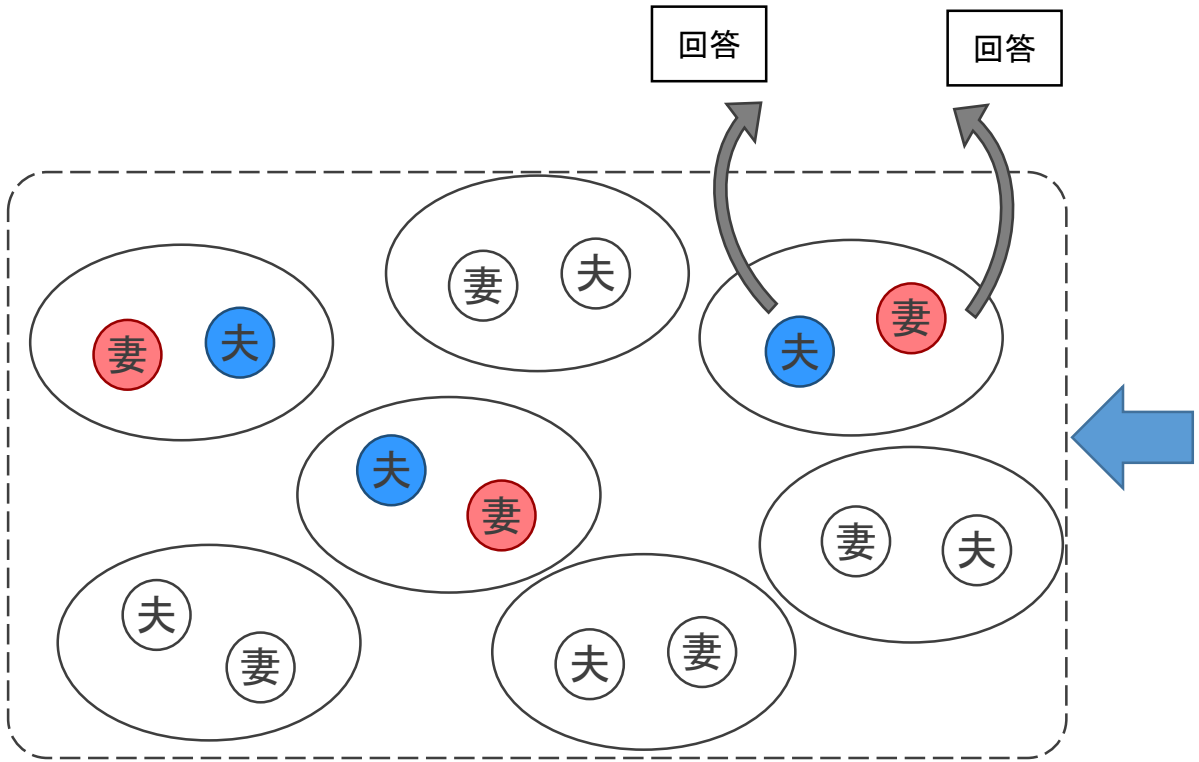
3.1　誰からデータをとるのか？

（1）横断データ、パネルデータ：1つの家族から1人が回答



同一家族内（夫婦内）で生じる個人間の認知的差異やズレをどう処理するかは家族研究の宿命ともいえる難しい問題（稲葉2005）
（この方法だとズレを扱えず・・・・）

（2）夫婦ペアデータ：同じ夫婦から夫と妻をペアで回答



個人間の認知的差異やズレに着目し、よりリアリティのある夫婦像を描こうとするもの。現実世界ではむしろ想定しやすい（ありうる）状況。

◆「夫の子育て」を例にとると、

妻

「もっと子育てやってよ！」

夫

「子育てやってるよ！」

果たして同じものが想定されているのか？

夫は「子育て」をしても、妻はそう思わない恐れも？

↓

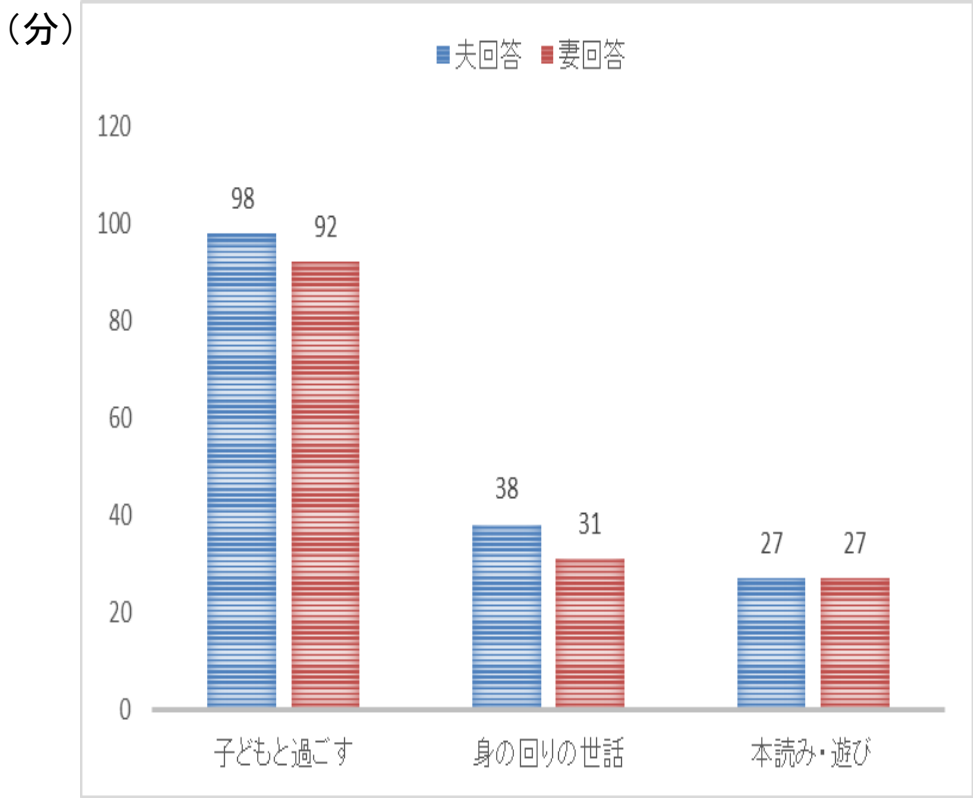
どのようなズレが起こるのかを、夫婦ペアデータで確認

3.2　夫の子育てをめぐる夫婦の認識のズレ：夫回答 VS 妻回答

（1）夫の子育て「量」について

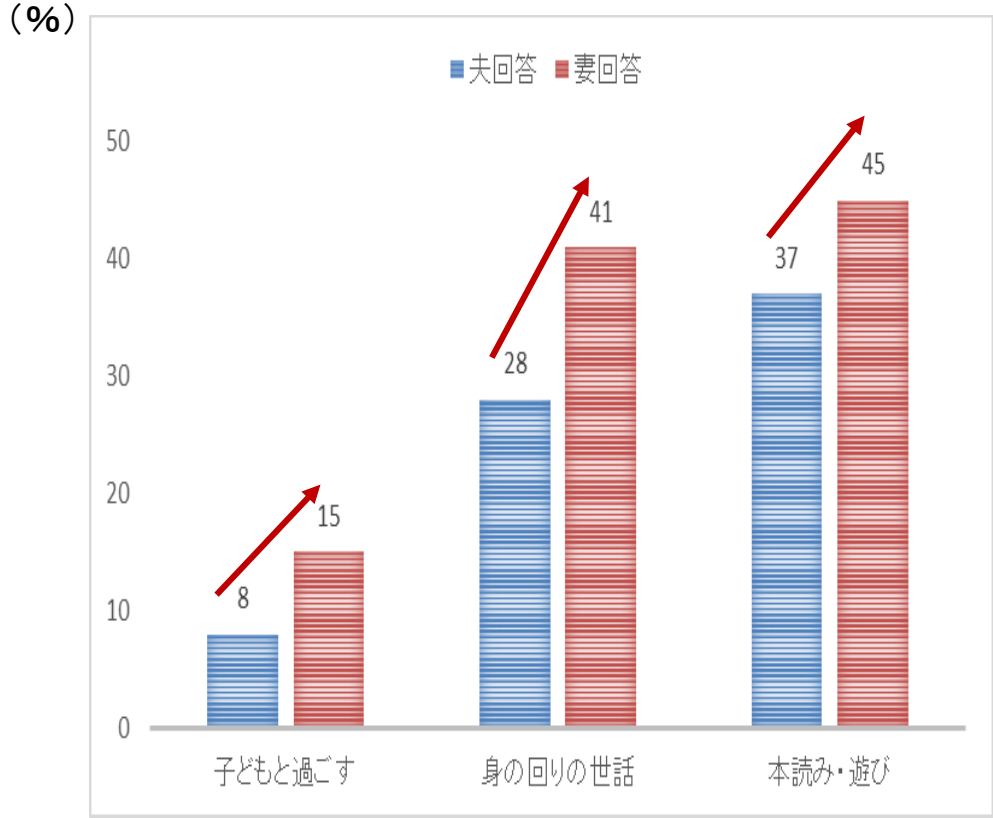
☆鈴木（2003）より

図表9　平日・夫の子育て時間量：平均値（分）



→夫のほうが長めに回答

図表10　平日・夫の子育て時間量：0分の割合（%）

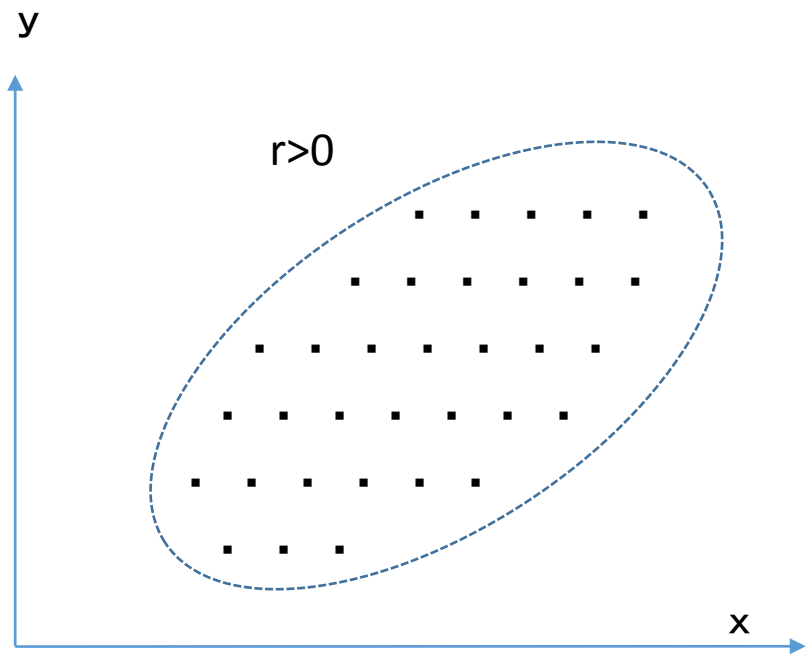


→妻のほうが、「0分」の回答が多い

（2）夫の子育て内容について

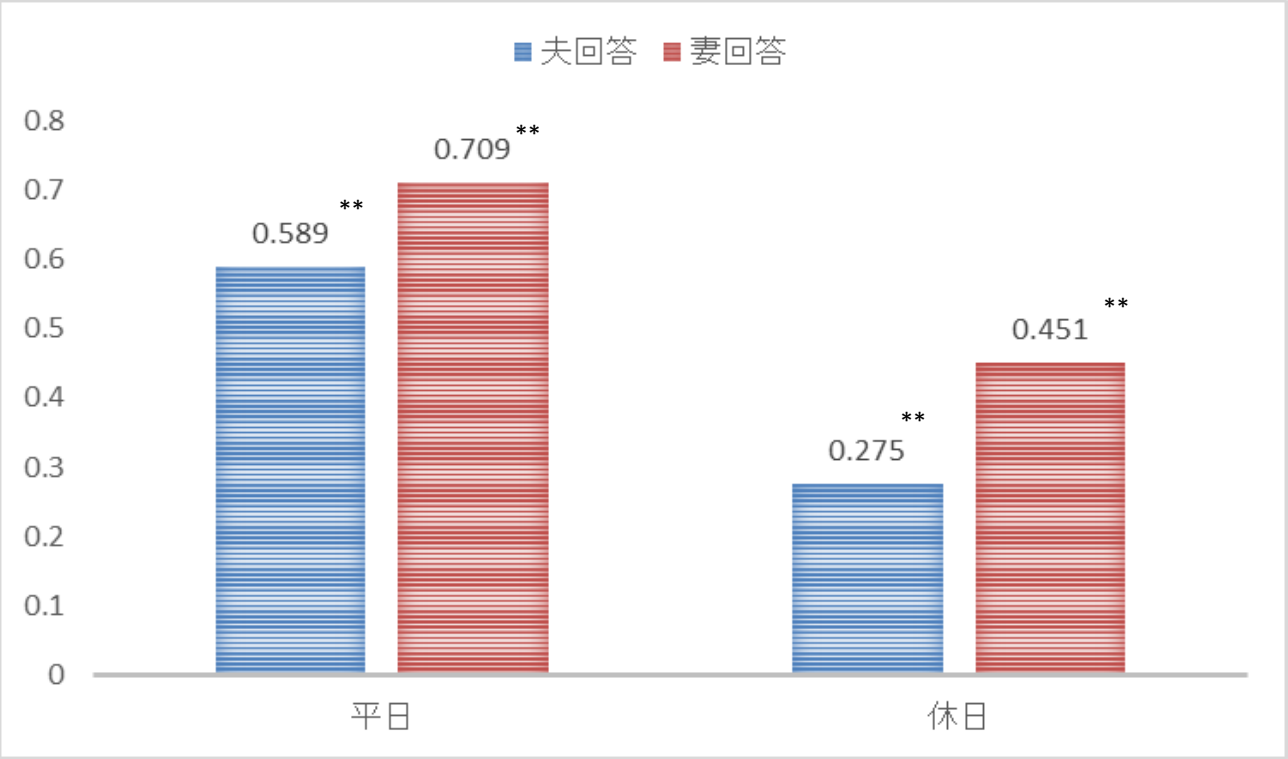
●内容の異なる子育ての関連（「身の回りの世話」と「本読み・遊び」）

◆相関係数：2つの量的な変数の線形関連を示す
（-1≦r≦1）



xが大きいほどyも大きい

図表11 「身の回りの世話」と「本読み・遊び」の相関係数

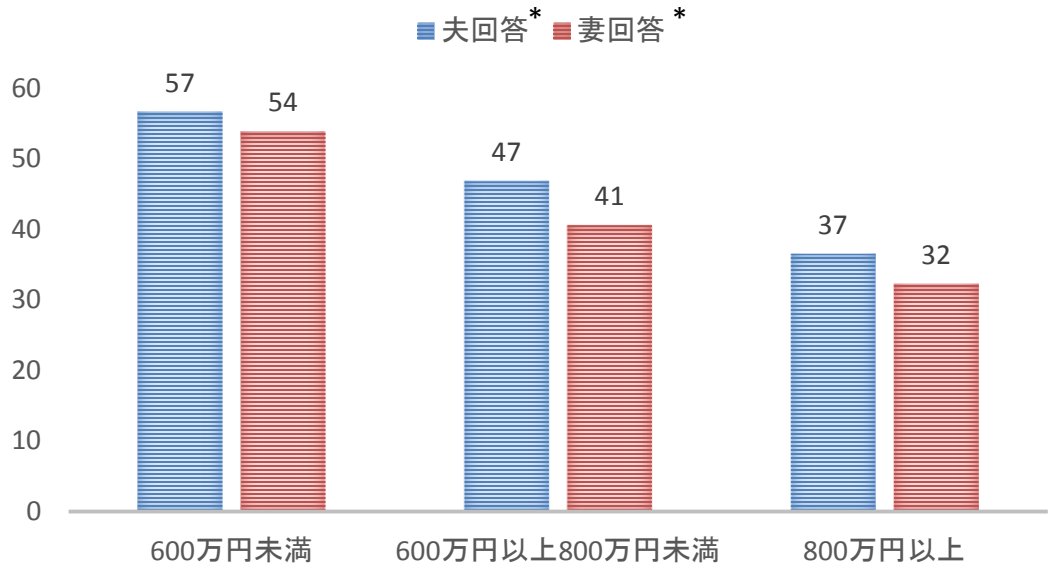


→ 妻のほうが子育てを連続的なものと捉える
（夫のほうが内容を区別する傾向）

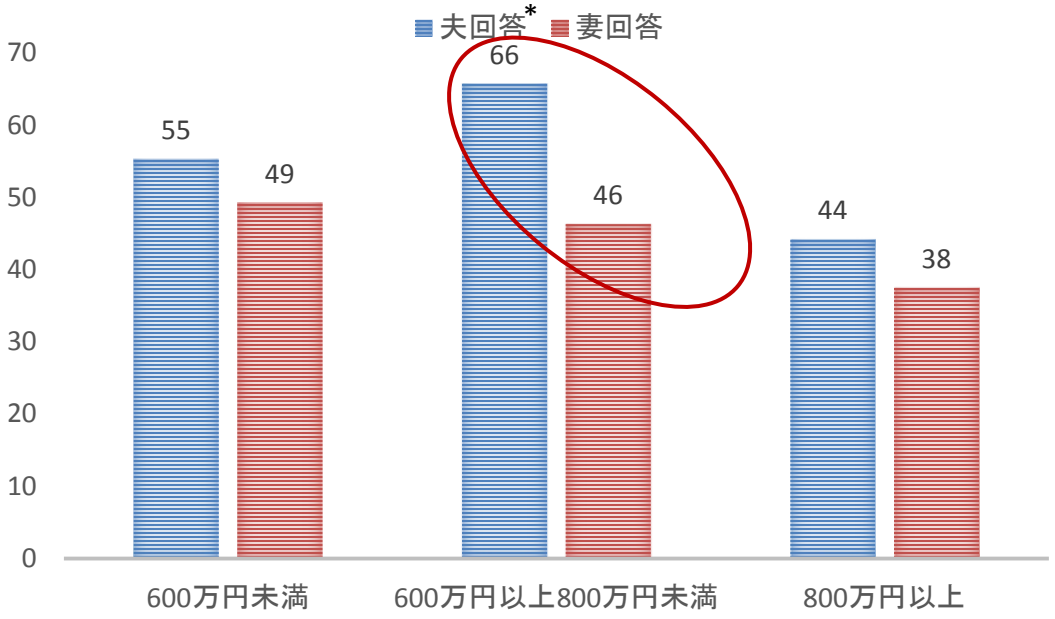
図表12 「夫年収」と「夫の子育て内容」の関連

＊夫の関与を「多」「少」に2分し、「多」の割合を示す（%）

＜世話的子育て＞



＜教育的子育て＞



＊世話的子育て：
寝かせる、衣類の着脱、排泄の世話、本読み・お話をする、話し相手になる、食事の世話の6項目から作成

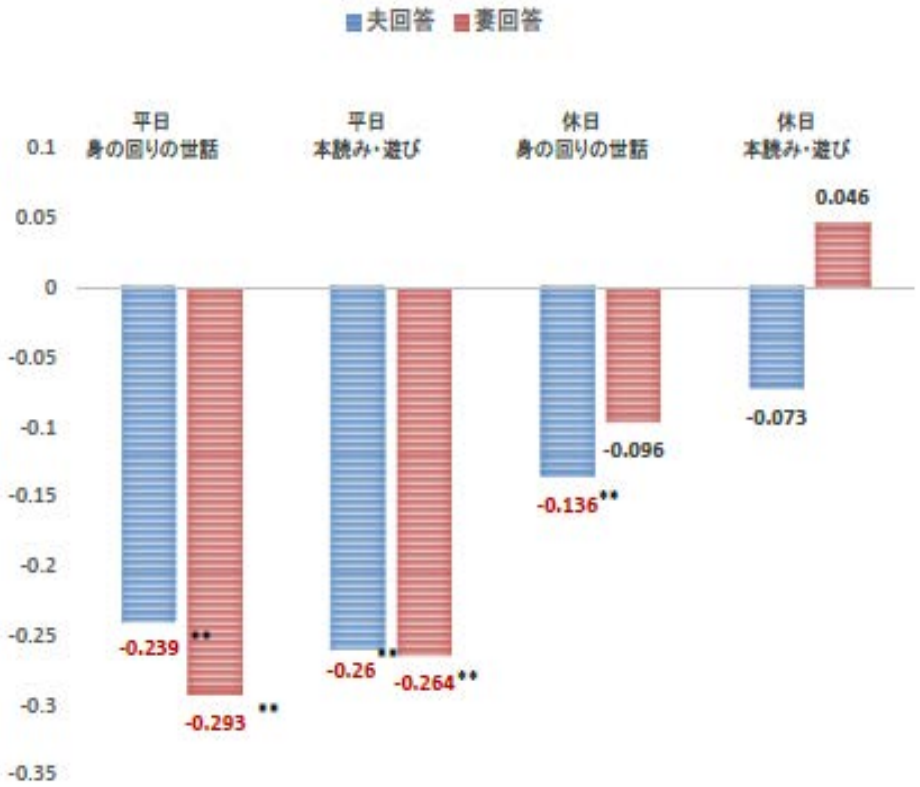
＊教育的子育て：
叱る、礼儀や習慣を教える、あいさつを教える、疑問に答えるの5項目から作成

→「教育的な子育てをする夫」という認識は、妻より夫のほうがもちやすい傾向

→子育ての捉え方：より連続的な妻、より区別する夫という傾向

（3）夫が子育てをする「とき」について：「平日」と「休日」の違い

図表13 「夫年収」と「夫子育て時間」の相関係数



＊夫の年収が低いほど夫の子育て時間が長い

図表14 「妻家計参入度」と「夫子育て時間」の相関係数

＊妻の家計参入度が高いほど夫の子育て時間が長い

→夫：基本的に平日と休日が同様な関連、妻：夫に比べると、平日と休日で関連が異なる
妻のほうが、平日と休日の子育てを異なったものと認識か？

（4）夫婦ペアデータからみた「夫の子育て」：夫回答 vs 妻回答

①量　：夫の自己過大評価傾向（妻の夫過小評価傾向）
②内容：より連続的な妻、より区別する（選択的な）夫
③とき　:平日と休日がより近い夫、より区別して捉える妻

夫：平日も休日も誰か（妻）と一緒の子育て
妻：平日は1人、休日は夫と一緒の子育て

↓

子育てをめぐる夫と妻の認識のズレ
夫婦間のバトル，夫婦関係満足度の乖離の原因に！

3.3　夫婦における夫婦関係満足度の乖離

◆通常、夫婦関係満足度（結婚満足度）は妻＜夫

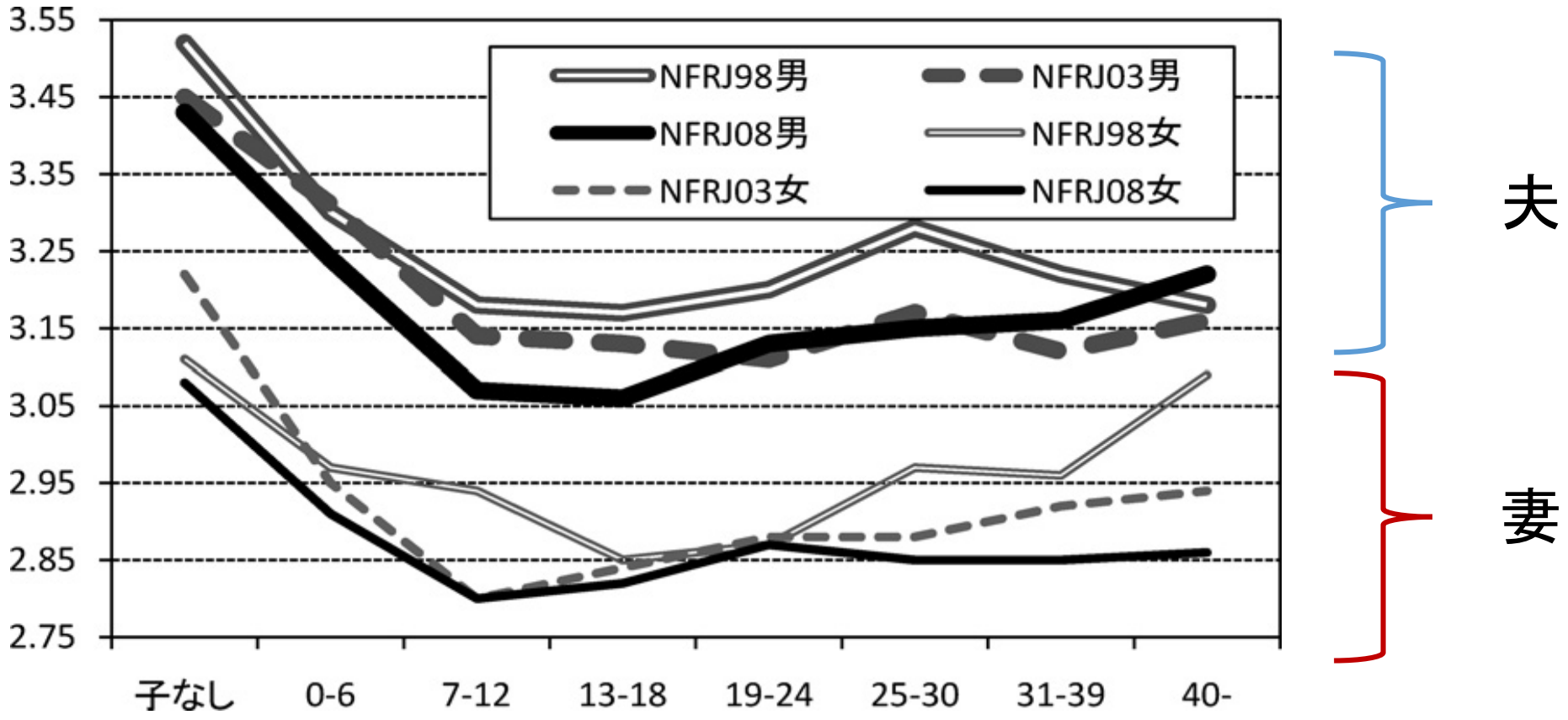


図15　末子年齢別にみた男女別結婚満足度（数字は平均値）　稲葉(2001)より

→どの夫婦でも同じなのか？　夫婦ペアデータで確認する

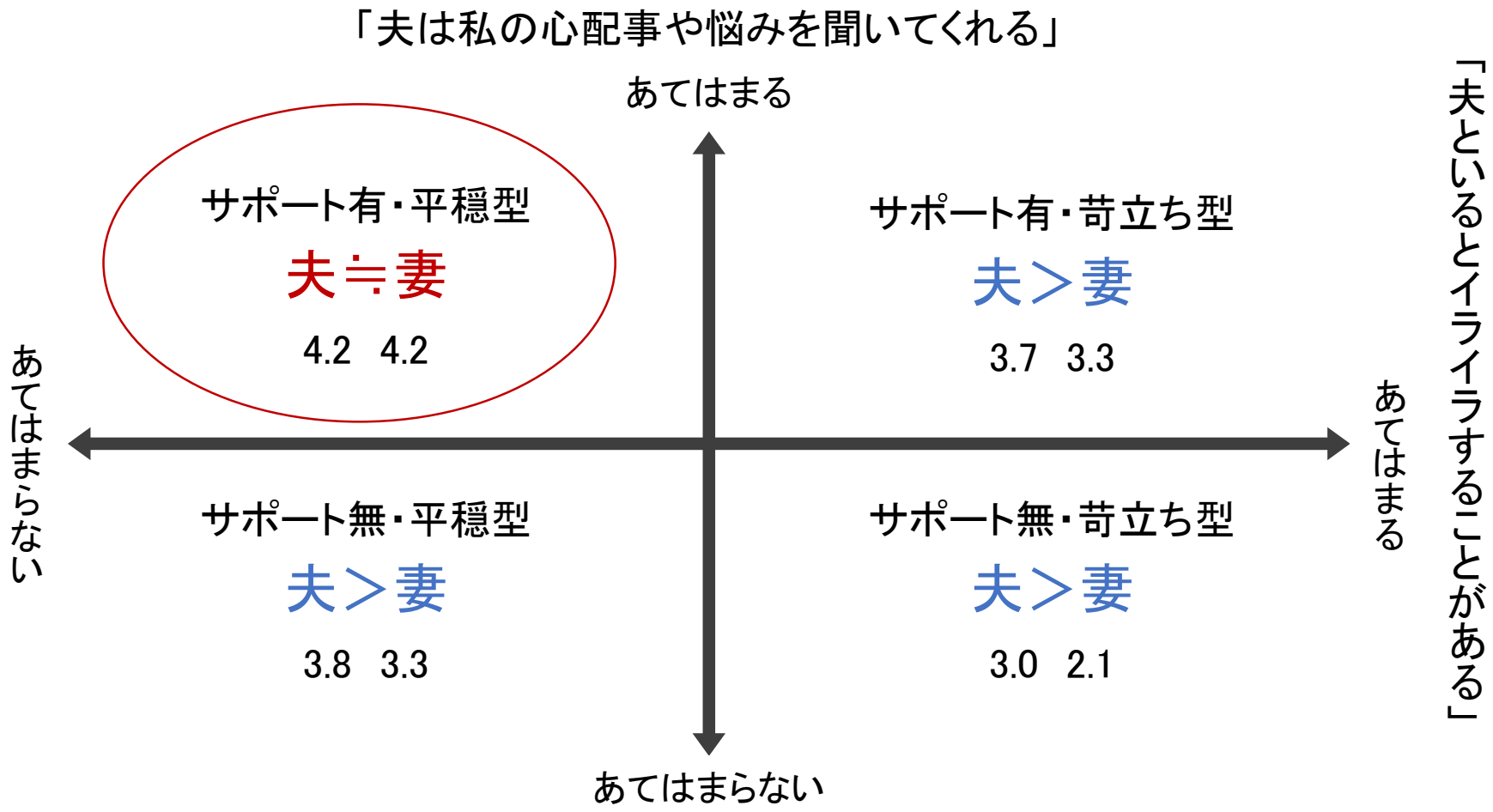
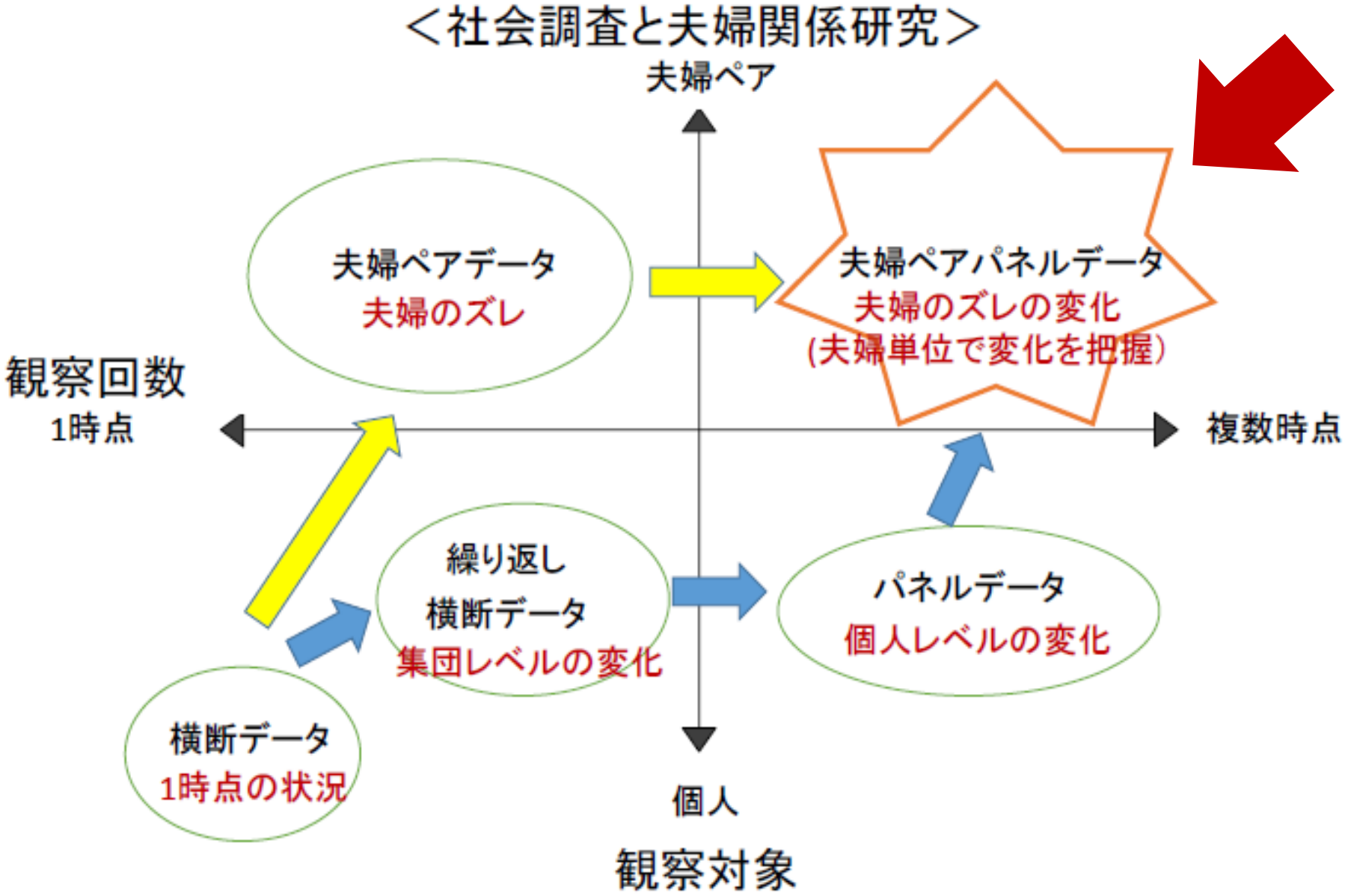


図20　夫婦関係満足度における夫と妻のズレ（夫婦類型別）

☆鈴木（2007）より

→夫と妻の満足度のズレは、夫婦ペアデータのみ把握可能。但し、1時点の状況のみ。
満足度の変化を夫婦単位で捉えるには夫婦ペアデータ and パネルデータが必要！


<社会調査と夫婦関係研究>
夫婦ペア
夫婦ペアデータ
夫婦のズレ
夫婦ペアパネルデータ
夫婦のズレの変化
(夫婦単位で変化を把握)
観察回数
1時点
複数時点
繰り返し
横断データ
集団レベルの変化
パネルデータ
個人レベルの変化
横断データ
1時点の状況
個人
観察対象

4. 現在、取り組んでいること：夫婦ペアパネル調査へ

4.1 「高校卒業後の生活と意識に関する調査」（高卒パネル調査）

(1)発足の経緯

2003年に「高卒パネル調査プロジェクト」発足

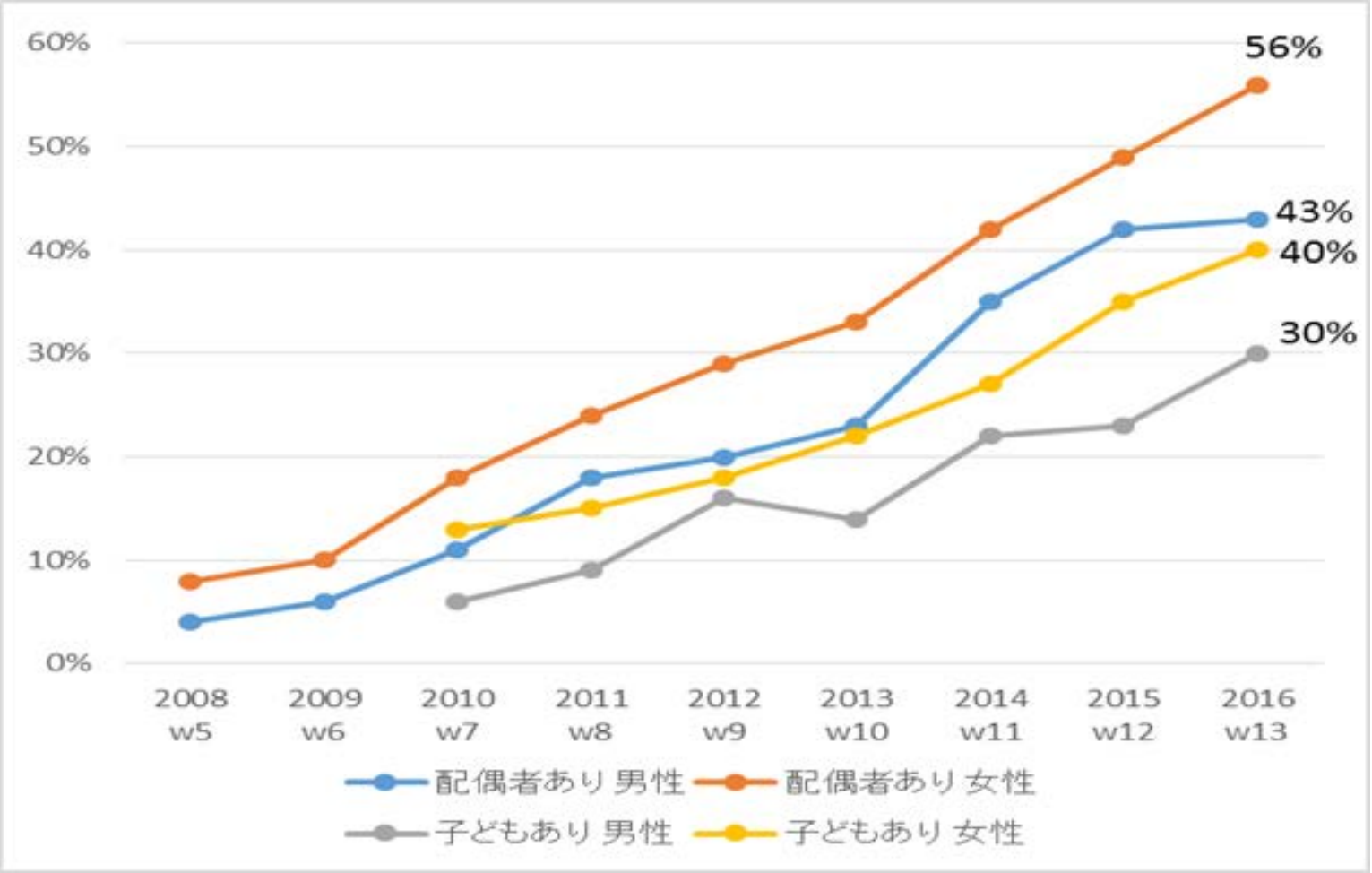
目的　　：現代の日本の若者がおかれている格差的な社会状況と、
その中での自立のプロセスを明らかにする。

調査対象：日本全国の中から抽出した4県101校の全日制高校に通う
高校3年生7563名を対象に、2004年1月に第1回調査を実施。

調査概要：以後、ほぼ毎年調査を実施。
昨年までに14回のパネル調査、2回の保護者調査、
6回のインタビュー調査（本人と保護者）を実施。
今年は15回目の調査を予定（対象者32～33歳）。

(2)対象者の状況

図表16　家族形成の状況：w5（22～23歳）～w13（30～31歳）まで

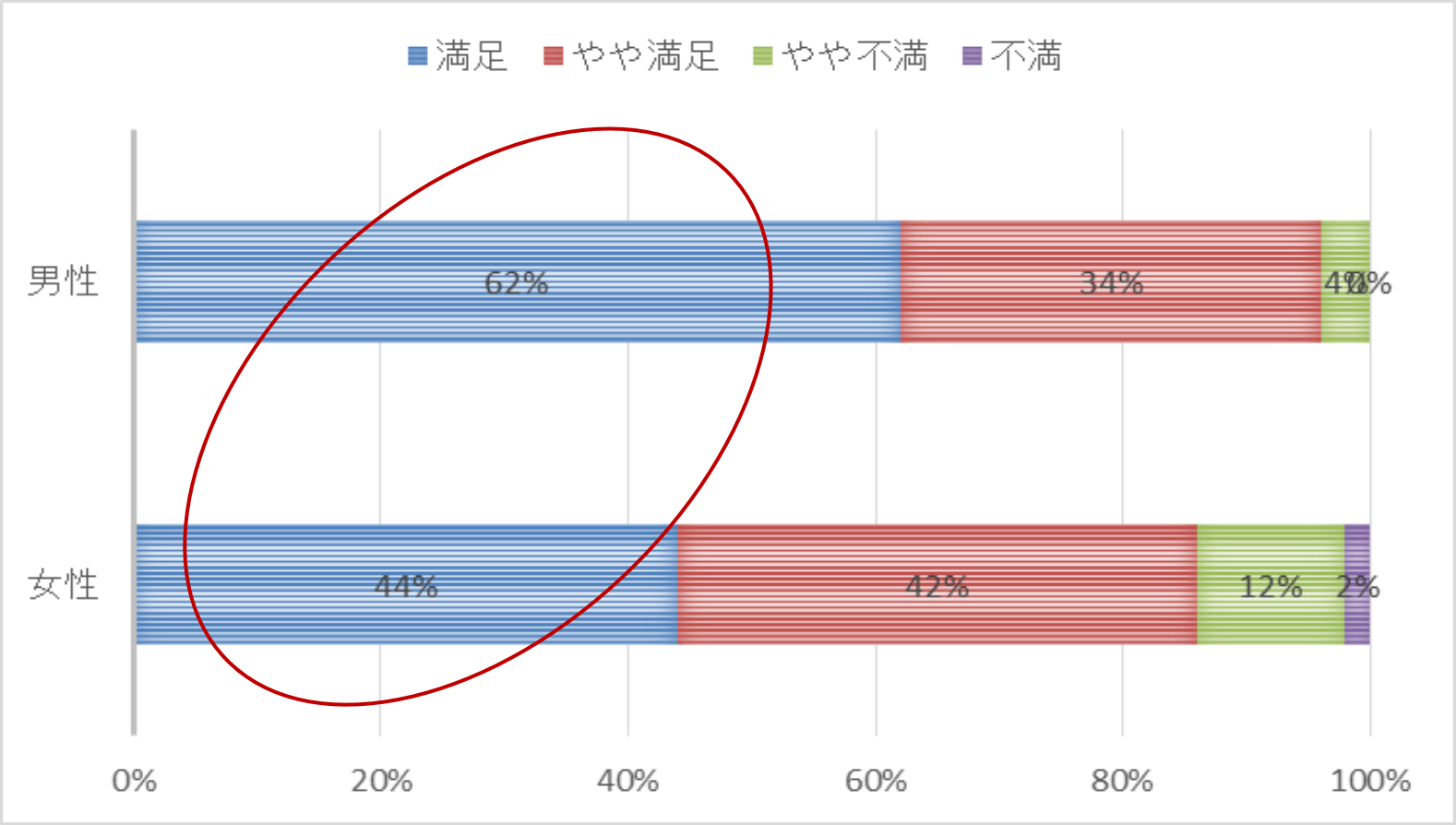


「配偶者あり」

「子どもあり」

w13の回答者数：
男性159名　女性290名

図表17　夫婦関係満足度（w12の状況）

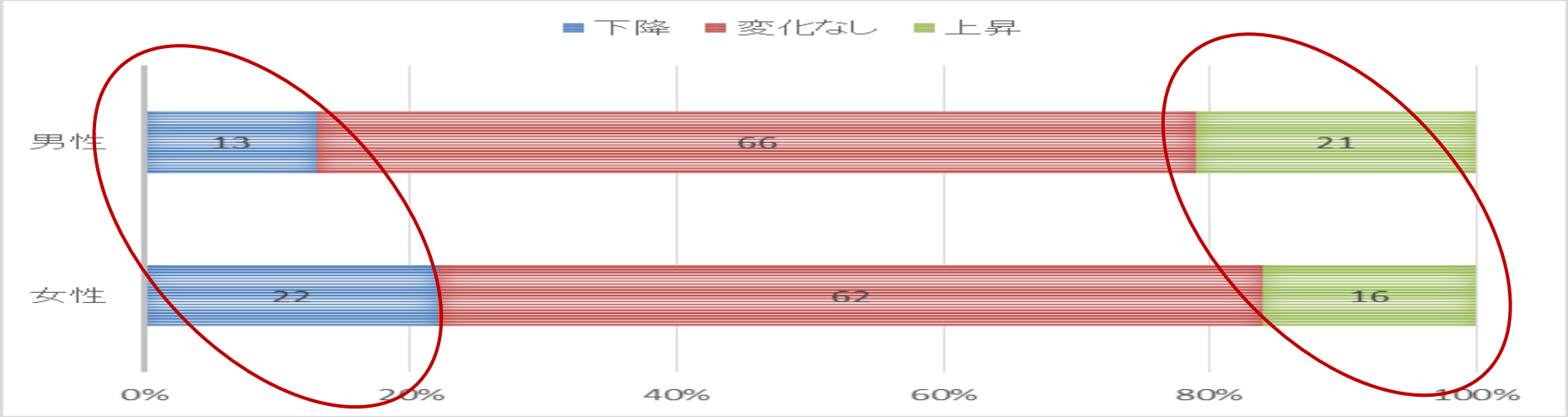


☆鈴木・佐藤（近刊a)より

→男女ともに総じて総じて満足の割合が高いが、特に男性でも満足度の高さが目立つ。
「満足」「やや満足」をあわせると9割超！

図表18　夫婦関係満足度の変化（w10～w12）

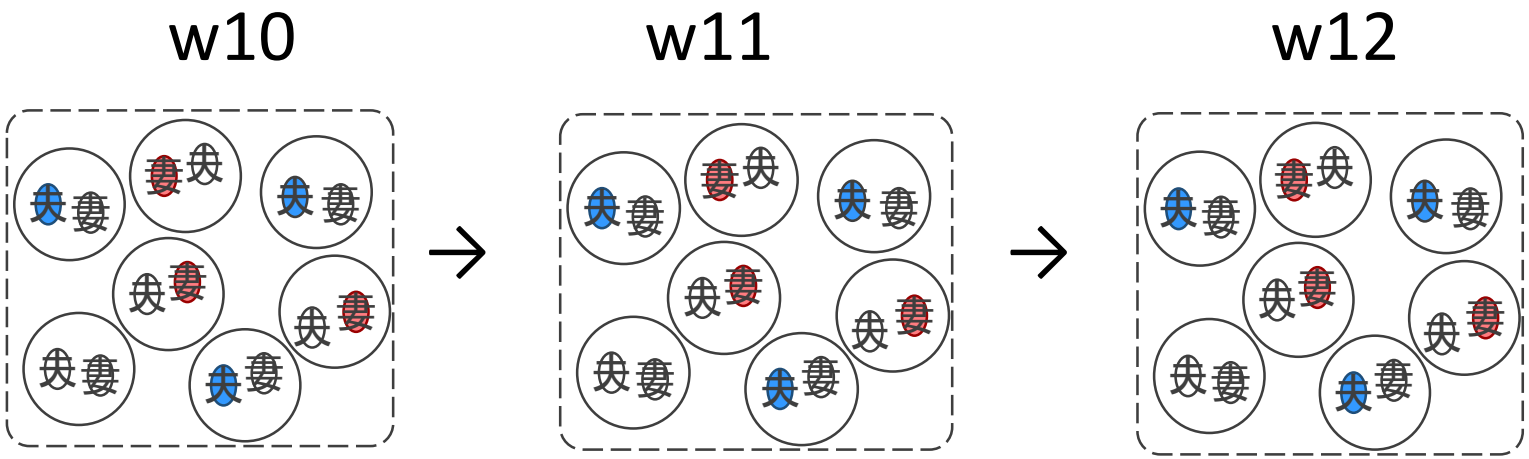
Q. 満足度は3時点（3年間）でどのように変化したのか？　男女で違いは？



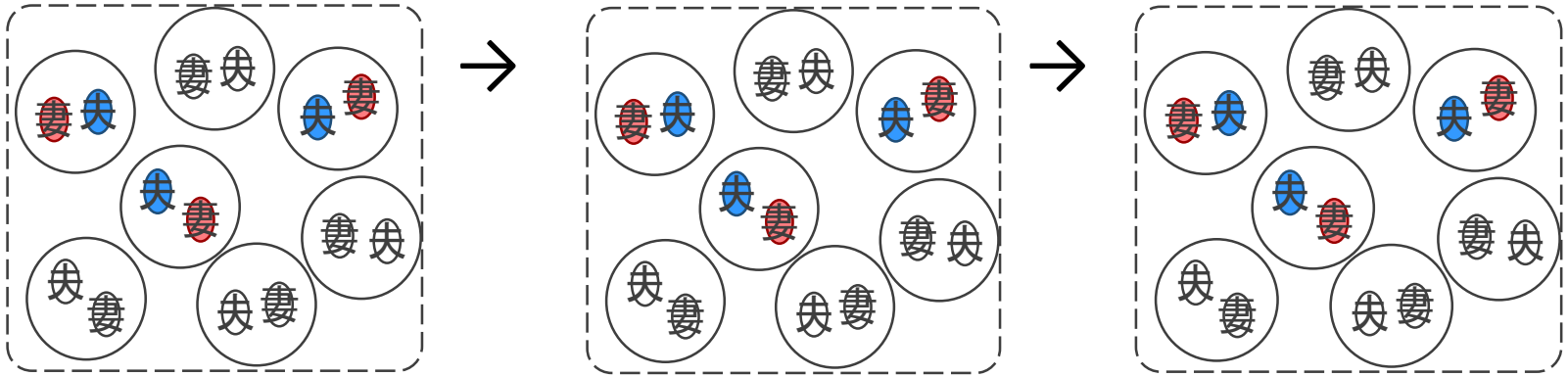
☆鈴木・佐藤（近刊a)より

→下降：男性＜女性，上昇：男性＞女性　結婚初期の段階で男女で差。

★把握できるのは、夫と妻それぞれの「変化のパターン」。



★変化のパターンが夫婦で似ているのか、ズレているのかなど、夫婦単位で把握するには、夫婦ペアで追跡していく夫婦ペアパネル調査が必要!

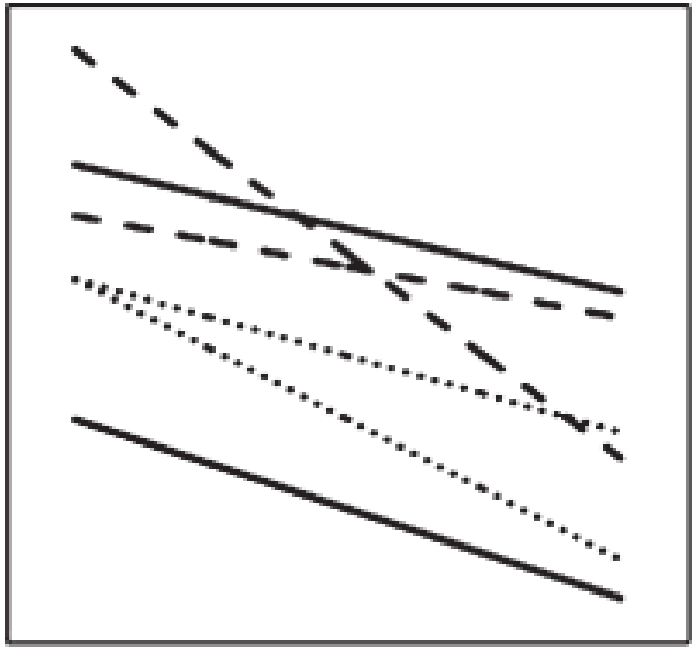


4.2　夫婦単位で「変化のパターン」を把握する

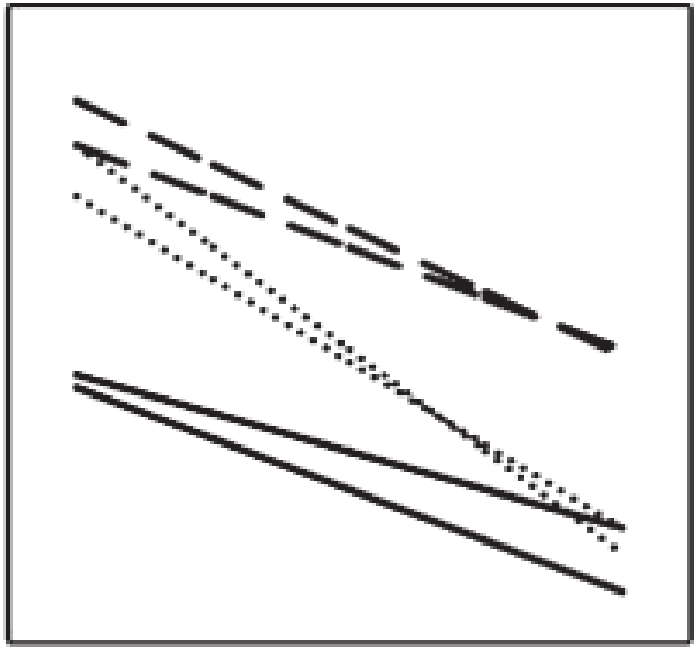
★「高卒パネル調査」の配偶者へ調査→夫婦ペアパネルデータの構築

Q. 夫と妻の満足度の「変化のパターン」は似ている？異なっている？

↑ 夫婦関係満足度



異なる夫婦



似ている夫婦

時間→

Jackson et al(2017)より

Q. どのような夫婦で異なるのか？似るのか？　その要因は何か？

5. まとめ：よいパートナーシップを築いていくために

◆妻の主観的意識に対する夫の家事・育児関与の重要性

＜男性の家事・育児の規定要因＞

①家事のニーズ量（末子年齢、子ども数）

②時間的余裕（就業の有無、労働時間の長さ）

③相対的資源（夫婦の学歴や収入などの差）

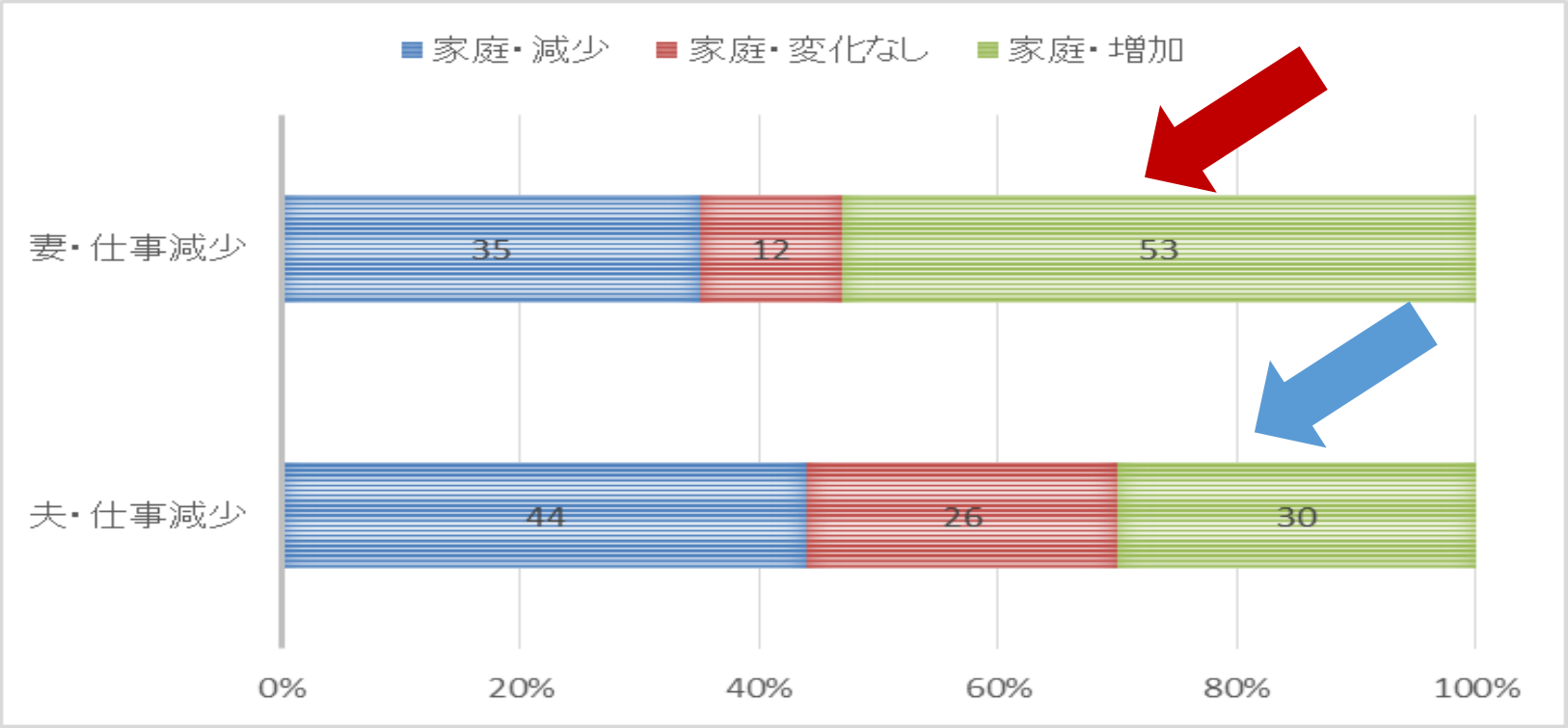
④ジェンダーイデオロギー

一貫して支持。 但し、横断データの結果

（同じ時点で異なる人を比較）

・パネルデータでみてみると（同じ人を異なる時点で比較）

図表19　仕事時間と家庭時間の関連（妻 vs 夫）



→「仕事減少」が「家庭増加」につながるのは妻：53%、夫：30%のみ
夫：労働時間減少が必ずしも家庭に関わる時間の増加につながらず。
夫の「フラリーマン」化？

★多角的な支援の必要性

職場
労働時間
休暇制度
人間関係・環境

家族・親族

友人・知人

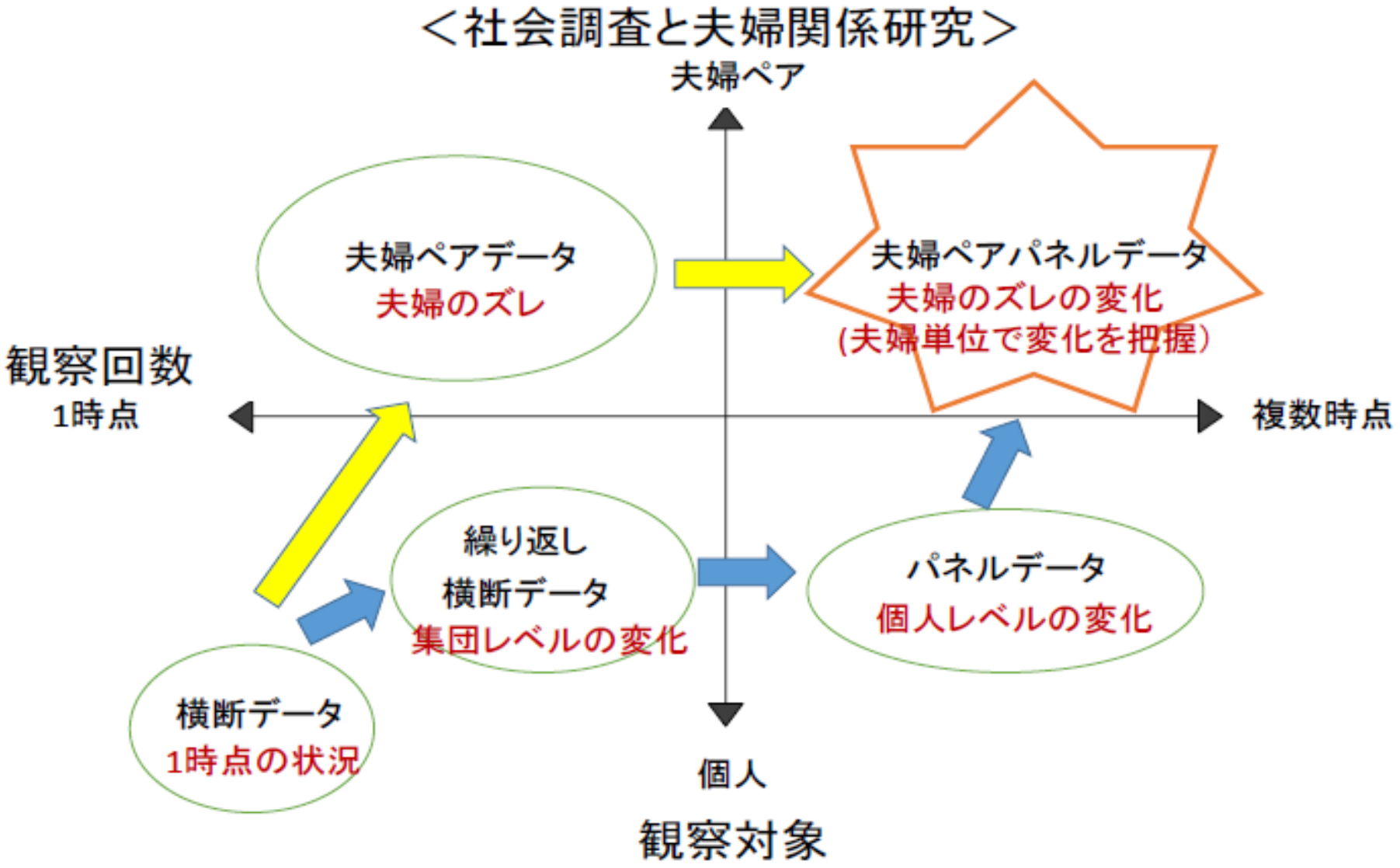
地域の
生活環境

保育
サービス

両立支援策
子育て支援
就労支援

→「ともに子育てにかかわること（経験の共有化）」で夫婦間のズレも縮小へ

◆社会調査データと夫婦関係研究：できること・できないこと



謝辞

本セミナーにおける「高校卒業後の生活と意識に関する調査」（高卒パネル調査）の分析は、科学研究費補助金（基盤研究(B)、研究課題番号16H03778）の助成を受けたものである。また、「全国家族調査パネルスタディ」（NFRJ-08Panel）の使用にあたっては、全国家族調査委員会から調査個票データの提供を受けた。ここに記して深く感謝申し上げます。

●参考文献

・稲葉昭英，2005，「家族と少子化」『社会学評論』日本社会学会，56(1): 38-53.

・石井加代子・山田篤裕，2009，「年齢階級・世帯類型別にみた日本の貧困動態の特徴」『社会政策研究』9: 39-63.

・Grace L. Jackson, Jennifer L. Krull, Thomas N. Bradbury, and Benjamin R. Karney，2017，Household Income and Trajectories of Marital Satisfaction in Early Marriage, *Journal of Marriage and Family,* 79 (June 2017), 690–704.

・永井暁子，2005，「結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化」『季刊家計経済研究』（66），76-81.

・————，2011，「結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化」『社会福祉』No52: 123-131.

・西村純子，2009，『ポスト育児期の女性と働き方』慶應義塾大学出版会.

・鈴木富美子，2003年，「子育てに関する夫婦の意識構造の計量的研究」大阪大学大学院人間科学研究科博士論文.

・————，2007年，「妻からみた夫婦関係・夫からみた夫婦関係——『夫からの情緒的サポート』と『妻の苛立ち』による夫婦類型の計量的分析」『家族社会学研究』日本家族社会学会．19(2): 58-70.

・————，2012年，「仕事時間が短くなれば、夫の家事・育児時間は増えるのか——パネルデータからみた夫婦における仕事と家庭の影響関係」『季刊家計経済研究』公益財団法人　家計経済研究所，No.96: 35-46.

・————，2015，「結婚の主観的持続性・安定性とその要因——変化の向きを考慮したパネル分析の試み」NFRJパネル研究会報告資料　@東洋大学（2015.7.5実施）.

・————，2016年，「育児期のワーク・ライフ・バランス」稲葉昭英・保田時男・田渕六郎・田中重人編著『日本の家族　1999-2009——全国家族調査（NFRJ）による計量社会学的研究』，東京大学出版会，187-202.

・————・佐藤香，近刊a，「結婚をめぐる若者の意識——家族形成初期のジェンダー差に着目して」佐藤博樹編・石田浩シリーズ監修『夫婦関係と出産・結婚満足度——格差の連鎖と若者 第2巻』，勁草書房，145-69.

・————，近刊b，「子どもが学齢期・思春期を迎えると、夫婦はどう変わるのか（仮題）」西野理子編著『妻と夫のパートナーシップ（仮題）」，ミネルヴァ書房.

・内海博文，2018（予定），「育児」景山佳代子編『DIY（自分でやる）社会学：はじめの一歩をふみだそう（仮題)」法律文化社.